

『おもろさうし』の木と毛の表記について

著者	佐藤 清
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	20
ページ	152-201
発行年	1996-02-26
URL	http://hdl.handle.net/10114/11930

『おもろさうし』の木と毛の表記について

佐 藤 清

要 旨

琉球諸方言において、木と毛はアクセントを除けば同音（例 首里方言 木 [ki:]・毛 [ki:]）であり共に／^{*}ke／にさかのぼる。『おもろさうし』では木と毛は共に「け」と「き」の両方の表記がある。近年の『おもろさうし』の研究では、その表記は極めて表音的で正確な表記であり、イ段とエ段はア行・ハ行・ワ行以外の行では仮名を混用した例がほとんどないとして、エ段の母音は／i／であって、まだ完全に／i／にはなっていないとされているけれども、木と毛に「き」の表記があるのはケ／kĭ／>キ／ki／の音韻変化がすでに生じていたためであり、少なくとも十七世紀前半の『おもろさうし』の初編の段階の琉球方言では、自律的なケ／kĭ／>キ／ki／とそれに平行したキ／ki／>チ／ci／の変化が生じていたことを説く。

I 導入

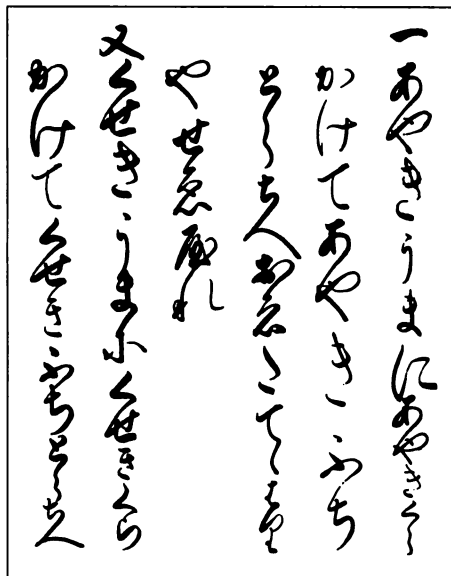
II 従来の研究の概観

III 『おもろさうし』の木と毛の表記の実態

IV 琉球方言のケ>キ・キ>チの変化の発生時期

V むすび

尚家本



一 あやきうまにあやきくら
 かけてあやきふち
 とらちへおゑたてゝはり
 やせゑやれ
 又 くせきうまにくせきくら
 かけてくせきふちとらちへ

(『おもろさうし』 卷十三895)

I 導入

このオモロの「あやき」と「くせき」の「き」は、『おもろさうし』の言語の音韻を考える上で興味深い問題を提起してくれる。

安仁屋本系の仲吉本では「あやきうま」の「うま」に「馬也」という言葉聞書が付いている。

鳥越憲三郎『おもろさうし全釈』は、このオモロを以下のとおり訳している。

美しい毛並の馬に、美しい木でつくった鞍をかぶせて、美しい木でつくった鞭をお持ちになって、しきりに追うて走って行かせよ。え、やれ (掛声)。

本論の主題から逸れるので詳論は省略するけれど、「とらちへ」について、『おもろさうし全釈』が「『とらちへ』〔取らして〕には、尊敬の助動詞『す』の連用形が省略されている。」として「お持ちになって」と訳しているのは賛同できない。高橋俊三『おもろさうしの動詞の研究』(88頁)がこの語をサ行四段活用動詞「とらす」の接続形(連用形が接続助詞「て」を口蓋化させた上、活用語尾「し」が脱落した語形)とするのを支持すべきであり、「与えて」の意と解釈するのがよい。

しかし、『おもろさうし全釈』は「文毛・文木がともに『あやぎ』と表記されていることに注意されたい。」という見過ごせない指摘をしている。

外間守善・西郷信綱『日本思想大系18 おもろさうし』(8刷を用いた)には、このオモロは以下のとおり見える

綾毛馬・奇せ毛馬	美しい毛の馬。	一	あやき うま 綾毛馬に
綾木鞍・奇せ木鞍	美しい木の鞍。		あやき くら か 綾木鞍 掛けて
綾木鞭・奇せ木鞭	美しい木の鞭。		あやき ぶち と 綾木鞭 取らちへ
			おゑたてゝ はり やせ ゑ やれ
		又	く せき うま 奇せ毛馬に
			く せき くら か 奇せ木鞍 掛けて
			く せき ぶち と 奇せ木鞭 取らちへ

左段は頭注。右段は仲吉本を底本とした校訂本文に校注者の外間氏が漢字を宛てたもの。

これらに対し、中本正智・比嘉実・クリスドレイク「おもろ鑑賞—琉球古謡の世界・65」において、「語釈」（中本正智氏執筆）は「あやき」・「くせき」の解釈に以下のとおり異論を唱えた。

「あやき」と「くせき」の「き」を「毛」または「木」と解するのは、どうも不自然だ。「毛」は「わしけ」（鷲毛）のように「け」と表記してあり、「木」は「きよらけ」（美しい木）、「くねぶげ」（九年母木）のように「け」また「げ」と表記してあり、ほかに「き」の表記が見つからないからである。

この「き」をどう考えたらよいか。「あやこはま」（綾浜）のように「あやこ」が美称辞となる例があるので、「あやき」を「あやこ」と同様に美称辞とする考えかたも成り立つ。対語の「くせき」も同様に考えられる。「毛馬、木鞍、木鞭」とせずに、「馬、鞍、鞭」をほめていることになる。

その【現代語訳】（比嘉実氏執筆）は以下のとおり。

美しい馬に美しい鞍をかけて
美しい鞭を馬にあて追いたてて走らせよ、
あれ、まあ
美しい馬に美しい鞍をかけて
美しい鞭をあてて

この「あやき」と「くせき」の「き」を考察する場合、本土の奈良朝の中央語で、木が乙類のキの音で、毛が乙類のケの音^(注1)であり、一方、琉球方言においては木も毛もアクセントをのぞいて同音であり／*ke／に遡ることが重要な意味を持ってくる。つまり「き」と「け」の仮名の文字表記の観点からだけでは解決不可能な問題であって、奈良朝中央語の乙類のイ列音と琉球方言との音韻対応の法則を理解する必要がある。

奈良朝の中央語において、乙類のイ列音は、オ列の乙類音またはウ列音と形態音韻論的交替を以下のごとくおこなう。

オキ乙	(起) —— オコ乙・ス (起)	ツキ乙	(月) —— ツク・ヨ <small>ㇿ</small> (月夜)
ヨ乙キ乙	(避) —— ヨ乙コ乙 (横)	サビ乙	(寂) —— サブ・シ (寂)
オチ	(落) —— オト乙・ル (劣)	カミ乙	(神) —— カム・カゼ (神風)
オリ	(降) —— オロ乙・ス (降)	フリ	(古) —— フル・シ (古)

(上二段活用動詞の未然形・連用形の活用語尾は乙類のイ列音である。)

発生論的には、乙類のイ列音は、オ列の乙類音またはウ列音が古形であって、それに接尾辞 i が融合して成立した音と考えるのが学界の共通見解となっている。

木は奈良朝中央語において、単純語としては以下のとおり乙類のキの音である。

さしぶの紀 (『古事記』歌謡57) 八十葉の紀は (『日本書紀』歌謡53)

木は合成語の前部要素としては以下のとおり乙類のコの音である。

許能波^のさやぎぬ (『古事記』歌謡20)

虚多^た智^ちうすけど (『日本書紀』歌謡105)

ところが、琉球方言では琉球方言の祖形の段階で、乙類のイ列音に対応する音のうち、ウ列音を古形とする方は甲類のイ列音の対応音に合流し、オ列乙類音を古形とする方は甲乙のエ列音の対応音と合流したために、木は毛と同音 (例 現代首里方言 木 [ki:]・毛 [ki:]) となったのである。

この対応の法則は、夙く有坂秀世氏が1930年代に気付いていた。しかし、氏の指摘は、当時の学界の水準をはるかに抜いていたこと、記述が断片的であったこと、さらに「ついでに言ふ」という書き出しであったことなどにより、その真価が理解されないままになってしまった。その後服部四郎氏が研究を発展させ、近年では琉球方言研究者の共通見解となりつつある。私もかつて『琉球古文献におけるイ列乙類音対応音の表記について』(以下「前稿」と称す)において、

琉球の古文献において、奈良朝中央方言のイ列乙類音に対応する音は、母音が日本祖語 *ui にさかのぼるものはイ列の仮名で表記し、*oi にさかのぼるものはエ列の仮名で表記してある

と述べたことがある。ただし「前稿」には誤りや未熟な点が非常に多く、本論はその訂正版の一つとしたい。ゆえに本稿は「前稿」と重複する部分が少なくない。しかし、読めば誰でもわかる誤りを直すこと自体に私はさほど興味を感じない。むしろ「前稿」において、『おもろさうし』で木に「け」と「き」の両表記が存在することについて、

「あかき」と「ゆすき」の「き」は、現代方言からすれば、「け」と表記してあるべきである。何故にこの二語の表記が現代方言と対応しないのか、現在の私には説明できない。この問題が解決するまで、「き」と「け」の共存理由は不明とせざるをえない。

として説明を放棄した問題について、その後の学界の進展をふまえ、自己解答を提出し御批判を仰ぎたいと思うのである。

なお、『おもろさうし』のテキストには尚家本を用いた。仲原善忠「尚家本『おもろさうし』は善本ではない」(『仲原善忠全集第二巻』収録)が指摘するとおりの欠点を尚家本は持つけれども、安仁屋本が行方不明の現在、後世の書写を経る度合いが一番少ないという利点があるからである。外間守善氏が『校本おもろさうし』の解説において、「尚家本は、右記のような欠巻、欠ページ、欠行、綴じ誤りの欠点を持つとはいえ、欠点は全巻中の一部分であり、具志川本の原形に近い最古の現存本として尊重されなければならない。」と述べたにもかかわらず、『おもろさうし全釈』が尚家本をテキストに用いたことを「『古さ』に対するいたずらな尚古趣味」と評し、「尚家本、仲吉本、ともに写本であって原本ではないことを見定めた上で二者を比べた場合、底本としていずれをとるか、自明なことではなかろうか。」(「おもろ語研究に関する若干の問題——『おもろさうし全釈』を読んで——」『沖縄の言語史』収録)と述べたのは不可解である。また、1709年の首里城の炎上による『おもろさ

うし』の焼失に際し翌年、「具志川本を台本にして書きあらため（謄写）をした。」（『沖縄古語大辞典』巻頭写真解説文）という考えの誤りを明かにした池宮正治「『おもろさうし』の成立」が「現在の『おもろさうし』は、一七一〇年に再編されたもの【尚家本・安仁屋本——引用者】を、直接的には原本としている。」とする認識にはかなりの理があると思う。そして尚家本の欠損・虫損部分は仲吉本でおぎなった。引用に際しては読解の便宜のため、適宜改行・分ち書きをおこなった。オモロの歌番号は仲原善忠・外間守善『校本おもろさうし』の通巻番号にしたがい算用数字でしめした。

オモロ語の解釈にあたり、いちいち根拠を示さなかった場合もあるけれど、伊波普猷氏にはじまる沖縄学の成果に基づくことは言うまでもない。なかんずく、仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典・総索引 第二版』（以下『おもろさうし辞典』とする）と『日本思想大系18 おもろさうし』に多くを負っている。なお引用するにあたっては、この二著は重複する面が多いため、整理した形となっている『おもろさうし辞典』の方を基本的には引用した。

現代琉球方言との対応の検討の資料には、沖縄本島南部の首里方言を記録した国立国語研究所編『沖縄語辞典』と、沖縄本島北部の今帰仁村字与那嶺方言を記録した仲宗根政善『沖縄今帰仁方言辞典』（以下『今帰仁方言辞典』とする）を基本資料とした。以下、特にことわらないかぎり首里方言は『沖縄語辞典』、与那嶺方言は『今帰仁方言辞典』からの引用である。

首里方言の確認調査は久手堅憲夫氏（1933年生）と伊狩典子氏（1931年生）でおこない、与那嶺方言の確認調査は山内昌敬氏（1923年生）でおこなった。

首里方言と与那嶺方言の確認調査の表記は、それぞれ『沖縄語辞典』と『今帰仁方言辞典』式の音韻表記をもちいた。他の琉球諸方言の表記は簡略音声表記をもちいた。ただし、音韻上／hi／と解釈すべき音は子音の [c] と [h] の区別をしないで調査したので [hi] で表記した。

Ⅱ 従来の研究の概観

ここに、『おもろさうし』における木と毛の表記についての卑見を述べるに先立ち、従来いかなる研究が存在し、いかなる説が存在しているかの大体を述べ、その論に批評を加え、もって卑見を述べる手懸りとしようと思う。

① 有坂秀世氏の論

奈良朝中央語のイ列乙類音と琉球方言との対応について、有坂秀世氏は「母音交替の法則について」（「音声学協会会報34」）の中で以下の指摘をおこなった。

ついでに言ふ。現代の琉球首里方言では、乙類のキやチのうち、ウ列音と交替するものに相当する所には

tsichi	(月)	ツキ——ツクヨ (月夜)
sijĩng	(過)	スギ——スグス (過)
uchi	(内)	ウチ——ウツモモ (内股)
kuchi	(口)	クチ——クツバミ (銜)

のやうに口蓋音があらはれ、之に対して、乙類のオ列音と交替するものに相当する所には

ki	(木)	キ ——コダチ (木立)
ukĩng	(起)	オキ——オコス (起)
utĩng	(落)	オチ——オトス (落)

のやうに非口蓋音があらはれてゐるやうであるが、果して偶然であらうか。専門家の御教示を仰ぎたい所である。「おもろさうし」や古代の金石文で、ウチ (内) クチ (口) カミ (神) などの末尾の音節はいつでもイ列の仮名で写されてゐるのに、キ (木) オリ (下) などは到る處ケ、オレとなつてゐて、キ、オリとなつてゐる所は殆ど見当らない。(もつとも樟などはクスヌキとなつてゐる。) これらも、素人考へに過ぎないかも知れないが、ちよつと注意を惹く所である。ウ列と交替するイ列乙類と、オ列乙類と交替するイ列乙類とは、極めて古い時代には音韻上区別されてゐたものではなからうかとも疑はれる。

さらに有坂氏はこの論文を収めた『国語音韻史の研究』の「後記」の中で次のとおり付け加えた。

なほ、「下りて」に相当する琉球語動詞は、(uyiti ではなくて) uriti である。これも「おもろさうし」の「^oおれて」の系統の形をそのまま伝えてゐるものと見える。(オ列と交替するイ列に対応する琉球語母音は、仮名書きに表れてゐる通り、一度は恐らく一般エ列母音に合流してゐたものであらう。)

有坂氏の説くところ簡にして要を得た文章となっており、論旨すこぶる明快である。この画期的な論が永く埋没してしまったことが惜しまれる。

ただし、『おもろさうし』では樟以外にも木を「き」で表記した例があり、現在の『おもろさうし』研究では、なぜ木を「き」で表記した例が存在するのかが問題なのである。

② 服部四郎氏の論

有坂秀世氏によるイ列乙類音と琉球方言との対応の法則の発見から、約四十年後に服部四郎氏は「琉球方言と本土方言」において、九州方言・八丈島方言さらに奈良朝東国方言を視野に入れ、日本祖語 (Proto-Japanese) に二重母音を想定することによって、琉球方言とイ列乙類音との対応を以下のとおり説明した。

八丈島、奈良東国

	祖語		奈良中央	
琉球、九州				
*i:	←	*ui	→ *i: (乙)	} → i (乙) [長短未詳]
*e:	←	*ai	→ *e: (乙)	
			→ *e: (乙)	→ e (乙) [長短未詳]

【[㍿]は奈良朝中央語のオ列乙類の母音に対応する日本祖語の母音の服部氏の推定音価——引用者】

服部氏は日本祖語から分岐発達したのちの琉球の首里方言に以下の三段階を想定している（「日本祖語について・11」より引用）。

奈良時代中央方言		日本祖語	琉球首里方言		
			A時代	B時代	C時代（現代を含む）
[k̚i]（甲類キ）	←	*ki	→ *ki	→ [k̚i]	→ [t̚fi] /ci/
[kʰi]（乙類キ）	←	*kui	→ *ki	→ [k̚i]	→ [t̚fi] /ci/
[kʰi]（乙類キ）	←	*kəi	→ *ke	→ [*kʰi]	→ [k̚i] /ki/
[kʰe]（乙類ケ）	←	*kai	→ *ke	→ [kʰi]	→ [k̚i] /ki/
[ti]	←	*ti	→ *ti	→ [t̚fi]	→ [t̚fi] /ci/
[ti]	←	*tui	→ *ti	→ [t̚fi]	→ [t̚fi] /ci/
[ti]	←	*təi	→ *te	→ [*ti]	→ [ti] /ti/
[te]	←	*tai	→ *te	→ [ti]	→ [ti] /ti/

そして氏は「琉球語源辞典の構想」の中で以下のとおり述べた。

『おもろさうし』の第一巻が結集された一五三一年は明らかに「B時代」ですし、二回目、三回目の結集の行なわれた一六一三年、一六二三年となりますと、ますます「A時代」から遠ざかりますが、それにも拘らず、たとえば「き」の仮名と「け」の仮名が——部分的な例外を除き——遣い分けられているのは何故か。これは次のように説明できます。私の仮説に従いますと、次のようになります。

A時代		B時代
き *ki	→	き [k̚i]
け *ke	→	け [kʰi]
く *ku	→	く [ku]
こ *ko	→	こ [ku]

すなわち、「A時代」に、「き」という仮名と *ki という琉球音とが結びつき、「け」という仮名と *ke という琉球音とが結びつき、その後琉球語において「A時代」から「B時代」への音韻変化が起こりましても、琉球語では「き」が [k̚i] と読まれ、「け」

は[k'i]と読まれ、その上[k'i]と[k'i]とは音韻として互いにはっきり区別されているのですから、「き」の仮名と「け」の仮名は混用されないわけです。

私は「前稿」においてこの服部説にしたがい、高橋俊三氏が『『おもろ』時代は、ア行、ハ行（特に語中）、ワ行を除いては、エ段の母音とイ段の母音との間にほぼ区別があったといえる。』（『『おもろさうし』に於けるエ段音とイ段音』『沖縄国際大学文学部紀要（国文学篇）第6巻第1号、後に『おもろさうしの国語学的研究』に吸収）とするのを批判し、「服部四郎氏の考えとおり、イ列とエ列の母音音素はすでにiに合流していて、両者は子音の口蓋化の有（イ列）無（エ列）で音韻的対立をしめしていた、と考えた方が「い」「へ」「ゑ」の仮名の混同する理由を説明しやすい。つまり、語中に於ては、ア行と（既に母音音節化していた）ハ行・ワ行には、子音がないのだから、口蓋化の有無でイ列とエ列の区別をつけることなど出来ないからだ。」と述べた。しかし、オモロ語のイ列とエ列の母音音素を共に/i/と考えると、例えば格助詞ガがイ列の仮名の後では「きや」と口蓋化し、エ列の仮名の後では「か」となっていて口蓋化しない理由を説明しにくい。音声的にはイ列の子音は口蓋化していたであろうけれど、音韻上は高橋氏の説くとおりのイ列（/i/）、エ列（/ɛ/）の母音音素の相違と考えるべきである。慎んで「前稿」におけるこの点での卑見を撤回する。

ところが服部氏はその後の「音韻法則の例外——琉球文化史への一寄与——」においては、「琉球語源辞典の構想」の論に対し、「今にして思えば、この考察にはまだ十分でない点があったと思う。」と述べて、仲宗根政善「おもろの尊敬動詞『おわる』について」の「おもろでは、『き』はまだ『ち』に法則的に変化していないが、カ行変格の連用形『き』におわるがつかとき、『ちよわる』となり、極めてまれな例になっている。『ちよわる』は、おもろに多く用いられていて、『来給う』『行き給う』の意味のほかに、『居給う』の意味にも用いられる。むしろその用例が多い。」という指摘をふまえ、以下の新説を提出した。

本土方言の動詞「来る」の連用形に対応する琉球語の連用形 *ki（A時代の形。母音の長さはしばらく考慮外におく）を、日本語の例に倣って琉球語でも「き」と表記する習慣が「A時代」から始まって、「B時代」を通じて行なわれ、「C時代」になってkiがtʃiに変化したにも拘らず存続したが、一方《いらっしゃる》を意味するようになったために「きよる」《来る》との意味的關係が薄れた「きよわる」という合成動詞は、「C時代」になって発音通り「ちよわる」と表記して「きよる」《来る》と区別する習慣が確立した。

『おもろさうし』に見られる右述のような表記法は正書法に近いもので、誤写ではない。故に、それは一七一〇年の書き改めの時に生じたものではなく、一六一三年、一六二三年の第二回、第三回の結集の際にすでに存した正書法に違いない。そしてそのような正書法はそう急には成立し得ないと考えられるから、さきに『音韻字海』によって推定し

たように、「C時代」はおそくとも十六世紀末には始まっていたものと考えられる。

それでは第一回結集の一五三一年はどうかというに、「語音翻訳」の一五〇一年からあまり遠くないから、まだ「B時代」だったのではないかと考えられる。右に示したように、第一巻にも「ちょわちへ」が一例、「ちょわる」が六例、「ちょわれ」が十四例見えるのは、後から仮名づかいを統一したものであろう。

この「音韻法則の例外」における服部氏の新説を、私は「前稿」執筆にあたって読んでいたけれども、恐らく理解できなかったのであろう、読み流してしまった。この服部氏の新説を要約すると、『おもろさうし』において、「け」の仮名は [ki] の音を表し、「き」の仮名は「ち」の仮名と共に [tʃi] の音を表して、正書法に従って「き」の仮名と「ち」の仮名を書き分けたということになる。しかし、『おもろさうし』の表記法を精査した『おもろさうしの国語学的研究』(143頁)が、

【キ>チの変化を反映した表記の——引用者】「確定的なものと可能性の強いものを合わせた八例中七例が「ち」の次に「や」「よ」の音が来ている(多分拗音であろう)点に注目される。すなわち、キがチに口蓋化する時期よりも少し前に、キャ・キョ(キュ)がチャ・チュに口蓋化した事を意味しているのではなかろうか。そうすると『おもろさうし』は奇しくもその時期(すなわち、キが単独では口蓋化していない時期)、あるいは、それよりほんの少し後の音を写していることになる。

と述べる論には説得力があり、服部氏の新説は体系的考察の結果としては評価できない。ただし、私は十六世紀末が服部氏^(注2)いうところの「C時代」つまりケ>キならびにキ>チの変化が起こっていた時代であることを否定するものではない。

③ 外間守善氏の論

外間守善氏は「おもろさうしの仮名遣と表記法」(『沖縄の言語史』収録)において、「『おもろさうし』の仮名遣いは、国語における歴史的仮名遣いが基本的な原則として踏襲されているが、原則から外れるつぎのような混乱が見られる。」として「エ列音とイ列音の混乱」の中の「表記法の混乱」の例として以下の例を示した。

こがねけ—黄金木	さび	} 鏑	おりなおちへ	} 降り直して	おりわちへ	} 降り給いて
	さべ		おれなおちへ		おれわちへ	

外間氏が上に示した例のうち、「さび」と「さべ」の関係はともかく(これについては後述)、他の例は有坂秀世氏の研究よりも後退したものである。なお「おりなおちへ」という表記は『おもろさうし辞典』の「総索引」では見つからない。

④ 中本正智氏の論

中本正智氏は『日本列島言語史の研究』の中の「第6章 おもろ時代の言語の研究」の「まとめ」において、「母音変化として、高母音化現象の $o \rightarrow u$, $e \rightarrow i$ がすでに起こっている。本来の o と u , e と i がそれぞれ統合していたとみてよい。」と述べている。

中本氏の『図説琉球語辞典』の中の「木」の項の以下の論も、『おもろさうし』の言語の母音を/a/・/i/・/u/の三母音とする立場からのものである。

木を表す琉球語は、*ke にさかのぼる。ki でないところが注目される。(中略)【『おもろさうし』で——引用者】「き」と「け」の両表記があるところから、当時既に ki に変化はしていたが、この音が「け」に由来するという意識があったのであろう。

『おもろさうし』の言語の母音を/a/・/i/・/u/の三母音とする点では、中本正智氏と外間守善氏そして「音韻法則の例外」における服部四郎氏は大同小異である。しかし近年、高橋俊三氏が『おもろさうし』の言語の母音は/a/・/i/・/u/・/i/・/e/・/o/の五母音であるという極めて注目すべき説を提出した。今後は高橋氏の五母音説の線に沿って考察を進めて行くべきである。また本論の「導入」で示したとおり、中本氏が「おもろ鑑賞一琉球古謡の世界・65」で895番オモロの「あやき」・「くせき」について、木に「『き』の表記が見つからない」とし、「あやき」・「くせき」を美称辞とする解釈を提出したのは、調査の不徹底と先行の研究の未消化にもとづく不注意な立論であり、学説として無効と査定せざるをえない。たとえば、以下に示すとおり837番のオモロで木を「き」で表記している例を氏はどう説明するのであろうか。

又 あかきとてゆすきとて とくか 又 あやきとてくせきとて ほうはしりや

(アカギを取って柞を取って 急ぐのか 美しい木を取って美しい木を取って 帆を挙げ走らせるのか)

木を「き」で表記した例がほかに無いと主張する以上は、「あかき」・「ゆすき」についての説明が必要であることは言うまでもない上に、「あやき」と「くせき」には、被連体修飾語が無いから美称辞ではありえず、この二語の「き」も木であることは疑いを入れない。以上のごとくにして私は中本氏の見解に同ずることができない。

⑤ 高橋俊三氏の論

高橋俊三氏は『おもろさうし』の語学上の問題に関して数多くの論を発表し、従来未知の成果を極めて多く導いている。その音韻と表記法に関する現在までの成果の要は、『おもろさうしの国語学的研究』に纏められている。氏は同書の「第二章 音韻詳論」において以下のとおり述べている。

エ段の仮名とイ段の仮名では、「ゑ」「へ」「い」、及び、稀に「ひ」が混用されているが、その他は、原則として区別がある。すなわち、「ゑ」「へ」「い」の母音はiになっていたが、その他の行ではeはiになり、iに近くなっているが、同音になっていなかったであろう。(44頁)

【『おもろさうし』では「え」の仮名は用いていない—引用者】

同書では、従来キとケの混同例されていた例に付いて、「てるきしやけ」と「てるきしやき」(人名)を混乱例として認めた(71頁)上で、それ以外では、キとケの仮名を書き分け

ていることを論証しているけれども、木の表記に関する論は以下のとおりである。

「くわけ (桑木)」<一七の二八>と「くすぬき (楠)」<一〇の二八他>のばあいは、本土方言の移入による混同で、母音の混同ではなからう。(45頁)

「くすぬき (楠)」 「ゆすき (イスノキ)」 「あかき (赤木)」 といった表記と「くわけ (桑)」 「くねぶげ (九年母)」 「こかねけ (黄金木)」 「きやきやるけ (輝かしい木)」 「きよらけ (美しい木)」 「しらけ (白い木)」 「よかるけ (良い木)」 といった表記を一見すると、後者は前者の「類推仮名遣い」と思われる。しかし、現在の方言では一般的に「木」がケに対応する音で発音されている点からすれば、「け」の方が琉球方言の古い形を写しているのである。それにしても、ケとキの混同例として上げられるのではないかと考えられるが、「き」と書かれたものと「け」と書かれたものを比較すると「き」は名前の一部のようになったものに使われており、「け」は複合語の意識の強いものに使われている。ちなみに、『沖縄語辞典』より「…チ」「…ジ」という形の名をあげると

hukuzi (福木) kusunuci (楠木) kuruci (黒木) hwinuci (ヒノキ)
などである。したがって、母音変化による混同とはならない。

【注として一引用者】 アカキは現在²akagi と言い、『おもろさうし』の表記と音韻上あわない。例外となる。(74頁)

『おもろさうしの国語学的研究』は『おもろさうし』の語学上の研究の金字塔のひとつとして、その意義を大いに高く評価すべきである。しかるに、上述の論は「アカキは現在²akagi と言い、『おもろさうし』の表記と音韻上あわない。例外となる。」という言葉から、氏が最終的な結論に達していないことが判るように、仔細に観察すると、なお以下数点に於てあきたりないところを見出す。

高橋説の難点は、まず、『沖縄語辞典』には載っていないけれども「ゆすき」又は「よすき」の語形で『おもろさうし』に現れる柞は首里方言で[juʃigi] と言い、『沖縄語辞典』の音韻記号で表記すれば/ʃusigi/であり、「あかき」と共に音韻対応法則の例外となる。また、895番と837番のオモロの「あやき」・「くせき」は、氏の分類では「複合語の意識の強いもの」に入るのであろうけれど、にもかかわらず木を「け」ではなく「き」で表記していることへの説明がない。ただし、同書45頁の「今後の検討を要する」例の中に、「わしけ……くせき (毛)」を挙げているのは、さすがに慎重ではあるけれども重要な論点を素通りした感がする。

そして高橋説の最大の難点は、『おもろさうしの国語学的研究』の「第一章『おもろさうし』の言語の概説」の中の「第四節 語彙」において、「漢語 (和製漢語も含む)」の中に「するぎ (シュロ木)」(40頁)を挙げていることである。「するき」について高橋氏は十分注意しなかったかに見える。木を表す「き」が漢語でないことは自明のこととして、「するき」が棕櫚木であるとするならば、それは「複合語の意識の強いもの」に入るはずであり、

この語も木の表記に関する氏の分類法の例外例となってしまう。この「するき」について十分注意を払えば、氏の論はまた別の見解に達していたであろう。

⑥ 『沖縄古語大辞典』の論

沖縄古語大辞典編集委員会（外間守善・内間直仁・大城學・加治工真市・新里幸昭・高橋俊三・玉城政美・野原三義・波照間永吉）編『沖縄古語大辞典』の「解説篇」の「I 音韻」の項には、以下の記述が見える。

③ エ段の母音

『おもろさうし』では、ア行・ハ行・ワ行以外のエ段の仮名とイ段の仮名は原則として区別されているが、eはiに近い音であったであろう。しかし、ア行・ハ行・ワ行のエ段の仮名（え・へ・ゑ）と、イ段の仮名（い・ひ・ゐ）は混同される例がたいへん多く、これらの行においては、eはiになっていたと考えられる。

この辞典は以下の本論でもしばしば引用するので、その〈見出し〉についての「凡例」の記述を以下に引用して置く。

本辞典で取り扱った文献資料は、時代的にも地理的にも相違し、したがってその言語体系も相違している。また、表記法もまちまちで同じ発音にもかかわらず、仮名が違うということがある。これらをすべて見出しに立項したのでは同じ単語があちこちに散在し、統一した説明がしにくい。そこで音韻変化による語形の違いは別単語と見なさず、一か所に集めた。

(1)見出しは、文献資料の表記と語源を手掛かりにして再構した形にした。再構にあたっては、沖縄・宮古・八重山・奄美の諸方言、および日本古語を参考にした。琉球方言で再構される形と日本古語の形が違い、どちらが古い形か決められない場合は、琉球諸方言で再構される形にとどめた。したがって、日本祖語形ではなく、沖縄祖語形である。（後略）

『沖縄古語大辞典』が琉球方言の史的研究の上で画期的なものであり、今後の琉球文化研究いな日本文化研究に測り知れない恩恵を齎すであろうことは疑いを入れない。「本書が沖縄文化探究のための基本資料であり、同時に、日本祖語再構のための資料であること、そして、現在の沖縄古語研究の水準を示したものであることだけは、言っておいてよいと思う。」（「刊行にあたって」）という言葉も文字どおり信ずることができる。

しかし、以下に示すこの辞典の「け【木】」の項の記述には、本論にとって看過すべからざる誤りが存在している。

け【木】^(注3) 団 囧 囧 囧キ 木。茎の部分が木質化している植物。（中略）『おもろさうし』には、木は「け」と表記され、現在の琉球諸方言でも木は「け」に対応している。上代語のイ段乙類には二種ありオ段の被覆形（派生語）を作るイ段乙類、たとえば、「すぎる——すごす」「き（木）——こだち」などの「き」の音は「け」と同音になった。（中

略) 語形 団 団き・きー・木・きい・け・木・木・木 団 団木・木／木々・木々

この記述におけるイ列乙類音と琉球方言との対応法則の説明の例として挙げるスゴ・ス(過)の奈良朝における確例は東国歌を集めた『万葉集』巻十四にみえる「思ひ須吾左む」3564)のみである。奈良朝の中央語では、スギ_乙(過)の被覆形はスグ・ス(「思ひ須具佐ず」『万葉集』巻十七4003)すなわちウ列音である。もっとも、スゴ・スという語形は平安朝になると中央語の文献にも現れる(「迹邁コシて」『大唐三蔵玄奘法師表啓平安初期点』)から、奈良朝の中央語にも万葉仮名で書いた確実な例がないだけで現実には存在した可能性までは否定し得ない。しかし、仮に奈良朝の中央語に*スゴ・スが存在したとしても、「ウ列音とオ列音とから成る二音節語根に於て、そのオ列音は乙類のものではあり得ない。」(有坂秀世「古事記に於けるもの仮名の用法について」)という奈良朝中央語の音節結合の法則によって、*スゴ・スのゴは乙類ではなく甲類と推定すべきである。東国歌に現れる例だから後回しにしたけれども「須吾左」の「吾」は甲類のゴの仮名である(ちなみにこの辞典が「主要参考文献一覧」にあげる『時代別国語大辞典 上代編』の「すごす」の見出しの「ご」には甲類の表示が付いている)。琉球方言のエ列音に対応する奈良朝中央語のイ列乙類音の被覆形は、乙類のオ列音^(註4)／ø／であって甲類のオ列音／o／ではない。*スゴ_甲・スにしても、「甲類のオ列音がウ列音と相通ふことは、ごく普通のこと」(「母音交替の法則について」)であるゆえ、スグ・スからの変化形と考えるべきであり、スギ_乙(過)は／*sugo／ではなく／*sugu／を語基(base)として成立したと考えるべきである。

この辞典の性格を鑑みるに、現代琉球諸方言が二義的資料であるとすれば、本土方言に至っては三義的・四義的資料でしかないはずであり、又そうでなくてはならない。したがって上述の本土方言の扱いの誤りは枝葉末節の瑕瑾という考え方をする人がいたとして一面もっともではある。しかし以下の記述を見ると問題を痛感する。

すごす【過ごす】^(註5) 団 団スィグシュン(時を)過ごす。《つ・きふる 雨に 花の 色 みたそ さかり いたつらに 過す とめは》[団 天八五四](後略)

この「すごす」という見出しは、琉球方言の観察から再構したものではなく、本土方言のスグスという語形の存在を見落として再構したものであろう。そしてもっといけないのは以下の例である。

すげる【過げる】^(註5) 団 団スィジユン ①時間や季節が経過する。終わる。(後略)

この「すげる」という再構形はやはり琉球方言の観察から再構したものではなく、奈良朝中央語のスグスの存在を看過し、イ列乙類音と琉球方言との対応法則を誤解し当てはめてしまったものであろう。この「すげる【過げる】」の項の用例を検討しても再構形は「すげる」ではなく「すぎる」とすべきものである。この項目の用例である島袋盛敏・翁長俊郎『評音評釈 琉歌全集』の1145番歌の「／²aci şiziti／(秋すぎて)」の／şizi／が／*suge／ではなく／*sugi／に遡るものであることは、この「すげる【過げる】」の項の前に掲げる「すげる

【挿げる】𪛗𪛗𪛗スィギユン」と比較すれば判る。「すぎる【挿げる】」の項の用例である『評音評釈 琉歌全集』の2224番歌の「／'ini şigiru／（柄にすぎる）」の／şigi／は、本土方言の下二段活用動詞スグ（挿）の連用形スゲ（「浪の^も絃すぎて」『古今和歌集』921）に対応するものである。

スギ_乙（過）の琉球方言の対応形は、琉球方言に上二段活用動詞が果して存在したかという重要な問題を解く鍵となる言葉である。上二段動詞の被覆形はウ列音／u／ないしオ列乙類音／ø／であるから、被覆形が／ø／の上二段動詞の琉球方言の対応形は、*ø+*i>*e の変化によって下二段活用となった。問題は被覆形が／u／の上二段動詞の琉球方言の対応形が、奈良朝中央語と同じく上二段に活用したかどうかということである。『おもろさうしの動詞の研究』は「『おもろさうし』には上二段動詞は存在しないと言えそうである。」（343頁）とする。勿論これだけでは偶々『おもろさうし』に上二段動詞が現れなかっただけのこととも考えるけれど、琉球方言に上二段動詞が存在しなかった可能性を想定せしめる一つの材料とは言えよう。実は『沖縄古語大辞典』の「解説篇」の「Ⅱ 文法」の項の「活用の種類」欄の「(二) 上一段活用動詞」の項が「射る」・「着る」・「似る」等と共に「過ぎる」を示しているのは上二段が一段化したという考えなのであろうけれど、「本篇」の「すぎる」という再構形と自家撞着を成すものである。服部四郎「日本祖語について・8」・「本誌前号所載の拙論への補説」は、現代首里方言と那覇方言をもとに以下の変化を想定している。

奈良時代中央方言 日本祖語 現代首里方言

[sug'i] ← *sugui 《過ぎ》 → [sidʒi]／şizi／

そして名嘉真三成『琉球方言の古層』の「第2章 音韻論 第1節 奈良朝中央語乙類のi母音と琉球方言」は、この服部説をふまえた上で、宮古および石垣方言ではスギ_乙（過）の対応形がイ列乙類音の対応法則に反して、被覆形がøであるオキ_乙（起）やオチ（落）の対応形と同じくエ列音に対応することを指摘し、「今のところ明らかではないが、*Cui（Cは子音）にさかのぼる上二段動詞は少ないので、おそらく、宮古方言などではukiʔi《起きる》、utiʔi《落ちる》などの類推変化（analogical change）を受け、siʔiʔi《過ぎる》になったものと思う。すなわち、『杉』は服部博士の言われるように『借用関係』で説明できるであろうが、宮古方言などの『過ぎる』は、おそらく他の上二段動詞の類推変化によるものと推定する。」と述べる。名嘉真氏はその「結語」において、「類推変化を明らかにする作業はさらにくわしく、また他の多くの語についても一語一語検討する必要がある。なぜなら、日本祖語にさかのぼる語とそうでない語を諸方言で峻別することは、祖語を再構する上で極めて重要な役目を演ずると考えるからである。」（60頁）と述べる。スギ_乙（過）の宮古・石垣方言の対応形が音韻対応法則の例外となるのは、類推変化によるものなのか、それとも本土方言からの移入語であることを示すものなのかは名嘉真氏が説くように今後徹底的に検討すべき問題である。

有坂秀世氏以来のイ列乙類音と琉球方言との対応法則の研究の発達を『沖縄古語大辞典』が理解していないのは残念なことである。

そして、この辞典の「け【木】」の項は、**語形**欄に「け」と「き」の双方を挙げるけれども、『おもろさうし』において「き」の表記が存在する理由を説明していない。さらに、毛については「一け【毛】 園 皮膚の表皮に生えている毛。→かしらげ・みのけ」という項があるだけで、『おもろさうし』に「き」の表記がある理由について言及していないので、本論において、『おもろさうし』で木と毛に「け」と「き」の両表記がある理由を考察しようと思う。なおオモロ語の木と毛の具体例についてのこの辞典の記述は本論で扱うそれぞれの語の箇所ですぐに随時しめす。

Ⅲ 『おもろさうし』の木と毛の表記の実態

以下にまず必要な作業として、『おもろさうし』における木と毛をそれぞれ「け」と「き」で表記した用例を集め整理し確認することにする。同一の語、あるいは、対語として用いている語はまとめて取り扱うことにする。

(A) 木を「け」で表記したもの

① くわけ (桑木)

くわけもとふとり (巻十四991)

くわけうゑてなてすうゑて (巻十七1202)

『おもろさうし辞典』には、「くわーげ (桑木) 桑の木。おもろ時代に桑木は鼓の材料となった。」とあり、『沖縄古語大辞典』には、「くはーげ【桑木】 団 園 植物名。桑の木。オモロ時代に桑木は鼓の材料となった。」と見える。

『沖縄語辞典』には「kwaagi 桑木。桑の木。」とあり、『今帰仁方言辞典』には「κ waa gi<桑木. 桑.」と見える。「くわけ」の表記は現代琉球方言との対応という点で問題がない。

② くねふけ (九年母木)

御まへに、くねふけは、おへて、(巻十三981この箇所は尚家本欠落、仲吉本から補う。)

『おもろさうし辞典』には「くねふーげ (九年母木) 九年母 (蜜柑) の木。」とあり、『沖縄古語大辞典』には「くねぼーげ【九年母木】 団 園 クニブギ 九年母 (蜜柑) の木。」と見える。

本論の主題からはずれてしまうものの、「くねふけ」は文法的に興味深い問題を提起する。

『沖縄語辞典』には、「kunibu オレンジ類の総称。みかんなど。」とあるだけで、「kunibu の木」にあたる語形は載っていないけれども、久手堅憲夫氏・伊狩典子氏によれば、「kunibu の木」は／kunibuNgi:／で／N／は「の」の意であり、この／N／をはさまない言い方はしないとのことであった。『今帰仁方言辞典』には「κ uniibu (植) 九年母. みかん.」・「κ unibuNgi みかんの木.」とあり、与那嶺の山内昌敬氏によれば／N／をはさまない

言い方はしないとのことであった。

『沖縄古語大辞典』の「くねぼーげ【九年母木】」の項は、**語形**欄に「**圀** 九年母木」を示しながら、琉歌の読み方を示したはずのものを「クニブギ」としているのは不審である。もっとも、その次の「くねぼーげぶし【九年母木節】**圀** クニブギブシ」の項には「現在はクニブンギブシという。」と見えるけれども。

首里方言と与那嶺方言の「蜜柑の木」の語形からすれば、『おもろさうし』では「くねふのけ」乃至「くねふぬけ」と表記してあるべきである。

981番オモロが安仁屋本系の諸本でしかその存在を確認できないため、本文にやや不安があるけれども、この場合は誤記・誤写以外の説明が可能である。オモロ語において、連体格の助詞「の」は以下に示すごとく明示的に示されとは限らない。

てかすはこはのなさきよら（巻十七1228）

てかすはこははなさきよら（巻十八1258）

くにのねにおわるおもいくわのおやおうね（巻十三903）

くにねにおわるいちへききよらてたよ（巻十七1235）

『おもろさうしの国語学的研究』は『おもろさうし』の対句における助詞の有無を調査した結果、「『の』『が・ぎや』『に』『は』『や』においては、明らかに音数律に対する配慮が窺われる。言いかえると、これらの文法機能より音数律（リズム）を大切にしたということである。」（172頁）と指摘している。

これらのことから、「くねふげ」は「九年母の木」と解釈して問題ないことがわかる。

なお奄美方言圏の島々でも「蜜柑の木」は「九年母の木」に対応する語形であり。「九年母木」に対応する言い方はしないようであるけれど、喜界島方言は例外となる。たとえば喜界島上嘉鉄の住友常正氏（1917年生）によれば蜜柑は [kuniha:] であり、木は [hi:] で、「蜜柑の木」は [kuniha:hi:] であるという。

南琉球方言圏ではむしろ「九年母の木」ではなく「九年母木」に対応する表現のほうが普通のようなのである。多良間島では、蜜柑は [funu:]、木は [ki:] で、「蜜柑の木」は [funu:gi:] であるという。この他、平山輝男『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』・『南琉球の方言基礎語彙』の「みかん（蜜柑）」の項で「蜜柑の木」を表す語形を見ると、南琉球方言圏の諸方言で「九年母の木」ではなく「九年母木」に対応する語形がみえる。

琉球方言圏の北端の島である喜界島方言と南琉球方言の「九年母の木」を表す語形がオモロ語の語法を保持するものであろうか、今後の課題である。

③ こかねけ（黄金木）

こかねけはうへて こかねけか下きみの（巻二75）

『おもろさうし辞典』には「こかねーけ（金木）九年母の木。こがね（クガニー）は蜜柑の一種、『け』は木。」とあり、『沖縄古語大辞典』には「こがねーげ【黄金木】**圀** 九年母

(くねんぼ)の木。こがね(クガニー)は蜜柑の一種。」と見える。

「こかねけ」は「こかね」の解釈がデリケートな問題を提起する。『混効験集』に「こかね 金子なり」(乾・器財)という言葉があるけれど、『沖縄語辞典』には、「kugani ① こがね。黄金。」という言葉と、「kuganii ⑩ 橘。こがね色の実がなるのでいう。šiikwaasjaa ともいう。」という言葉が載っている(同辞典の「凡例」によれば、⑩は平板型アクセント、①は下降型アクセント)。「こかね」の表記は／kugani／①にも／kuganii／⑩にも対応し、そして／kuganii／⑩の語源が黄金であるため、『おもろさうし辞典』や『沖縄古語大辞典』のごとく表裏一体の解釈が出てくるわけである。しかし、『今帰仁方言辞典』には、「ku「gaaʔni 黄金. こがね. 金. フ「ガーʔニともいう.」という言葉と、「kugaaʔnaʔa (植)ひらめれもん^{ママ}の一種. 実がやや小さく、黄金色に熟する.」という言葉があり、ここからも明かに意味の分化に応じて、黄金とミカンの一品種の名の語形を変えようとする異化(dissimilation)の働きがあったことが解る。故に「こかねけ」の「こかね」は、「黄金」なのか「蜜柑の一品種名」なのか、はっきりさせるべきであると私は考えた。そして、首里の久手堅憲夫氏と伊狩典子によれば／kuganii／は実も木も／kuganii／と言い、「kuganiiの木」に当る言い方はしないとのことであった。また与那嶺の山内昌敬氏によれば、首里・那覇方言でクガニーと呼ぶ品種の蜜柑は与那嶺方言では実も木も／kugaanaa／であり「kugaanaaの木」に当る言い方はしないとのことであった。この現代首里方言と与那嶺方言から、「こかねけ」は「蜜柑の一品種名の木」ではなく「黄金の木」の意であるという考えに私は傾いていた。

しかし、誇張していうと、伊狩典子氏が「クガニーが熟して生っている姿は、とってもきれいですよ。」と述べられたのを聞いた瞬間、「こかねけ」は表現の表層レベルでは「黄金の木」ではあるけれども、その「黄金の木」として自動的にクガニー(蜜柑)の木を連想させる表現なのだと気づき、池宮正治「黄金木の下で」が、『こがねげ<黄金木>の『こがね』は、たんなる美称ではなく、九年母は黄色く熟した果実に太陽の精気を充満させた精木であり、あるいは太陽そのものの象徴でもあったろう。」と述べる論を首肯するようになった。

④ よかるけ(良い木)

⑤ きやきやるけ(良い木)

よかるけはゑらてきやきやるけはゑらて(卷十三792)

『おもろさうし辞典』に以下のとおり見える。

「よかるーけ(良かる木) 『け(木)』の美称。良材。」

「きやきやるーけ(輝る木) 輝やかしい木。良材。『きやきやる』は『きやかる』に同じく美称辞。」

『混効験集』に、「きやゑるひ よかる日と云事也」(坤・言語)と見えることから、「き

「やきやる」は「よかる」と同じ意味であることが解る。そして、『沖縄語辞典』に、
 「jukaru (連体) [文] よき。縁起のよい。cuunu～hwini. [今日のよかる日に] きょうの
 よき日に。」という言葉が見える。ここから、「よかる」と「きやきやる」が「け」(木)の
 美称辞とわかる。

⑥ しらけ (白い木)

⑦ きよらけ (清ら木)

しらけおゑて きよらけおゑてからは (巻十一-635)

しらけおゑて きよらけおゑてから (巻廿一-1498)

しらけおゑて きよらけおゑてから (巻廿二-1553)

『おもろさうし辞典』には以下のとおり見える。

「しらけ (白木) 立派な木。『混集 (坤・支体)』に「白毛反詞きよらげ清毛」とあるが、
 『け』を『毛』とするよりも『木』の意にとるのがよいと思う。」

「きよらけ (清ら木) 立派な木。」

『沖縄古語大辞典』には以下のとおり見える。

「しらけ【しら木】㊦㊧ ②白木。普通名詞で、白い木、立派な木、の意とも、植物
 名とも考えられる。」

「きよらけ【清ら木】㊦㊧ 立派な木。木の美称。」

『沖縄古語大辞典』の「しらけ【しら木】」の項が「植物名とも考えられる。」とするの
 は、この項の①でウムイの「しらき」の用例を挙げて、「植物名。久米島でシラキというト
 ウダイグサ科のヒメユズリハのこと、もしくは沖縄本島北部の辺土名でシルキというトウダ
 イグサ科のヤンバルアカメガシワのことであろう (琉球植物方言集)。」という語釈をふまえ
 たものであろう。しかし、「きよら」は『混効験集』に『きよらさ 美麗なり 清の字を書
 和詞にも通ふ 徒然草に萬にきよらを盡しても又は手足などのきよらに肥あふらつきたらん
 と有も此心なり」(乾・言語)と見える言葉であり、『混効験集』に「しらげ 白毛 反詞
 きよけ 清毛」(坤・支体)と見えることから、「しら」と「きよら」は共に「け」(木)の
 美称辞として解し得るのであり、オモロ語の「しらけ」を特定の植物名と考える必要はない。

念のために述べておくと、『混効験集』の「しらげ 白毛 反詞 きよけ 清毛」の
 「げ」を木と解すべきとする見解は、外間守善『混効験集 校本と解説』にも見えるけれど
 も、『混効験集』の例は「支体」の項目なのであるから、『おもろさうし』の「しらけ」・
 「きよらけ」とは別語と考えるべきであり、『沖縄古語大辞典』が「しらけ【白毛】」・
 「きよけ【清毛】」の項目に『混効験集』の用例を挙げているのは正当である。

⑧ うへ (ゑ) け (植え木)

あやみねにあつる うきおほちかうへけ

あやみねにあつる うきはわかかうへけ (巻十一-591)

あやみねにあつる うきおほちかうゑけ
あやみやにあつる うきはわかうゑけ (巻廿一1478)

(○印の文字は尚家本で欠損しているため、仲吉本から補った。)

あよみねにあつる おきよおほちかうゑけ (巻十三779)

『おもろさうし辞典』は「うへけ 未詳語。ほめたたえる語らしい。『うゑけ』に同じ。」とするけれども、『おもろさうし全釈』と嘉手苅千鶴子「桑木の鼓」そして『沖縄古語大辞典』が植え木とする説に賛同する。

(B) 木を「き」で表記したもの

① くすぬき (楠)

くすぬきはこので (巻十538)

くすぬきのみおうね (巻十三891)

『おもろさうし辞典』には「くすぬき (楠) くすのき。船材に使っている。」とあり、『沖縄古語大辞典』には「くすーの一き【楠】団固 植物名。船材に使った。今の方言でクスヌチ。『くすのき』の語形で移入されたらしく、『き』が口蓋化してチとなっている。」と見える。

『沖縄語辞典』には「kusunuci くすのき。楠。樟。」とあり、『今帰仁方言辞典』には「kusunuci (植) くすのき。」と見える。

天野鉄夫『図鑑琉球列島有用樹木誌』の「クスノキ」の項を引くと、「琉球に自製品はなく旧時より伝来し、植栽されまたは逸出したものである。」とあるから、移入語と考えて問題は無い。

② あかき《アカギ》

③ ゆ (よ) すき《イスの木》

又 あかきいやこつく、又 よすきいやこつく、 (巻十535)

大ぬしかまへにあかき ゆすきのはなのましろまからさきよれば (巻十三822)

あかきとてゆすきとてとくか あやきとてくせきとて ほうはしりや (巻十三837)

『おもろさうし辞典』には以下のとおり見える。

「あかき 樹名。アカギまたはカタン。沖縄名アカギ (赤木)。巨大な常緑樹で、材は淡桃色から赤褐色であり、建築材、船材などに用いる。」

「ゆすーき (ユス木) 樹名。イスの木。三重、和歌山、鳥根、福岡辺で『ユスノキ』、熊本、鹿児島、高知、愛媛辺で『ユス』、というが、沖縄一般では『ユスギ』、北部国頭では『ユシギ』という。」

「よすきーいやご (ヨス木権) イスの木の権のこと。『よすき』はイスの木 (沖縄名ユシ木) のこと。『ゆすき』に同じ。『いやご』は権。」

『沖縄古語大辞典』には以下のとおり見える。

「あかげ【赤木】**㊦** 𣥵アカギ 植物名。亜熱帯植物の喬木。巨大な常緑樹で、赤肌の木であるためアカギといわれる。材は建築材、船材などに用いる。(中略) **語形** ㊦あかき 𣥵 赤木」

「ゆすーげ【ゆす木】**㊦** 植物名。イスの木。マンサク科の常緑高木。家の囲いに多く植えた。家屋の用材に用いる。三重、和歌山、島根、福岡辺りでユスノキ、熊本、鹿児島、高知、愛媛辺りでユス、というのが、沖縄一般ではユスギ、沖縄本島北部の国頭ではユシギという。(中略) **語形** ゆすき」

現代首里方言からすれば、「あかき」・「ゆ(よ)すき」の「き」は「け」と表記してあるべきであることは先に述べた。これは現代与那嶺方言からも言えることである。アカギ(学名 *Bischofia javanica* Bl.)は与那嶺方言では／haaki／と言う。この／-ki／は以下のとおり『おもろさうし』の「け」の仮名に対応して「き」の仮名に対応しない。

sakii (酒) —さけ (巻十一643他) takii (丈) —たけ (巻五216他)

sacii (先) —さき (巻六333他) ʔisigaci (石垣) —いしかき (巻五217)

柞は、仲宗根政善「与那嶺方言の撥音『ン』と促音『ツ』の「ii→iN (アクセントの関係でiが長音化する。)」例の中に、「jusiNgi 《いすの木。jusiigi ともいう》」とあるから／jusiigi／が古形なのであろうけれど、その／gi／は／kwaagi／(桑木)と同様に『おもろさうし』の「け」の仮名に対応して「き」の仮名に対応しない。アカギと柞が現代首里・与那嶺方言と『おもろさうし』の表記との対応法則に反して、「あかき」・「ゆ(よ)すき」と表記してある理由は、後に詳しく考察する。

④ あやき《綾木》

⑤ くせき《奇せ木》

あやきとてくせきとて (巻十三837)

あやきうまに あやきくらかけて あやきふちとらちへ

くせきうまに くせきくらかけて くせきふちとらちへ (巻十三895)

『おもろさうし辞典』には以下のとおり見える。

「あやーき(綾木) 美しい木。」

「くせーき(奇せ木) 美しい木。立派な木。」

『沖縄古語大辞典』には以下のとおり見える。

「あやーけ【綾木】**㊦** 美しい木。対語『くせけ』(中略) **語形** あやき」

「あやけーくら【綾木鞍】**㊦** 美しい木の鞍。(中略) **語形** あやきくら」

「あやけーぶち【綾木鞭】**㊦** 美しい木の鞭。ただし、木製の鞭は不詳。修辞の上のことか。(中略) **語形** あやきぶち」

『混効験集』に「あやみや くせみや 庭の事也 あやくせはほむる言葉也」(坤・言語)とあり、「あや」・「くせ」が美称辞であることが判る。

895番オモロの「あやき」と「くせき」の解釈は、同オモロの「あやきうま」・「くせきうま」の「き」の解釈を明確にして論ずべきである。

⑥ しとき・しちよき・しちようき

うらおそいのちやうくちしときやよこかせ (巻十五1083)

しちよきやかたはるに (巻十524)

しちようきやてうみおうね (巻十三789)

きみとよみましちよきやれは (巻十三855)

『おもろさうし辞典』には、以下のとおり見える。

「しときや 船名。『しとき』は『しちようき』(上質の船材)に同じ。その木で造った船をいう。」

「しちようき(しちよう木) 木材。舟を造る材。木名未詳。材質の良さは楠、杉、松、の順であるが、その中の何れであるか明らかでない。」

「しちよぎ 木材。『しちようき』に同じ。」

『沖縄古語大辞典』には、以下のとおり見える。

「しちよげ【しちよ木】団 木材。舟を作る材。木の名は未詳。材質の良さは、楠、杉、松の順であるが、何れであるか明らかでない。オモロー五巻一〇八三の『しときや』は、その木で造った船をいう。また『しちよぎや』で地名という説もある。」

池宮正治「浦添関係おもろ」は1083番オモロの解釈の中で以下のとおり、この「き」を木と解釈することに留保を示している。

しとぎやよ 「しと」が木の名であると思われるが未詳。「ぎ」は木か。「や」は指小辞。「よ」は助詞。「……を」に相当する。「しとぎや」は木材の名であろうが、これで造った船を指している。

平山良明「太陽穴について」も、この語について「結局はわからない。」と述べており、私按もない。「しとき・しちよき・しちようき」の「き」が木であるかどうかは不明とした方が良い。

(α) 毛を「け」で表記したもの

① わしけ(鷲毛)

うまみちやもわしけ わしとふさよわる

のみみちやむわしけ わしとふさよわる (巻十五1078)

かなはとよみみちやわしけ (巻廿1365)

『おもろさうし辞典』は「わしけ(鷲毛) 鷲色の毛。馬の毛の美称。」とし、『沖縄古語大辞典』は「わしけ【鷲毛】団 鷲の毛。鷲色の毛。馬の毛の美称。」とする。

(β) 毛を「き」で表記したもの

① あやき(綾毛)

② くせき (奇せ毛)

あやきうまにあやきくらかけて (巻十三895)

くせきうまにくせきくらかけて (巻十三895)

『おもろさうし辞典』には以下のとおり見える。

「あやーきーうま (綾毛馬) 美しい毛の馬。」

「くせーきーうま (奇せ毛馬) 美しい毛の馬。」

『沖縄古語大辞典』には以下のとおり見える。

「あやーけーうま【綾毛馬】㊦ 美しい毛の馬。(中略) 語形 あやきうま」

「くせーけーうま【奇せ毛馬】㊦ 美しい毛の馬。(中略) 語形 くせきうま」

実は『おもろさうし辞典』の初版では、この「あやきうま」・「くせきうま」の「き」を木と解釈していた。表記の上だけならば、その可能性は考えうる。しかし、このオモロの背景を考え、「神は馬に乗って現われるとは、全島に見られる信仰であるが、本歌はそうした神の乗られた馬のことを詠んだものであろう。」(『おもろさうし全釈』)という指摘や、以下に示す「おもろ鑑賞・65」の【鑑賞】(比嘉実氏執筆)の論をふまえると、この「あやきうま」・「くせきうま」が木馬である蓋然性は極めて低いことが判る。

このおもろは航海や航海の儀礼を謡った歌をあつめた十三巻の「船ゑとのおもろ御さうし」に収録されている。おもろ編纂の時期の分類から考えると航海儀礼に関するおもろと判断されていたらしい。(中略)

おもろにおいて馬は特別な象徴性を持つ動物であった。巻十-五一四のおもろは聞得大君の就任式の儀礼を謡ったおもろである。その中で斎場御嶽の三庫理に飾り立てられた美しい白馬がつながれ、その白馬がお嶽から東海上にあると想定されるミルヤ・カナヤに行く聞得大君の乗り馬として使われることが謡われている。同じ儀礼の中の与那覇浜においても聞得大君は馬に乗って他界を目ざすことが謡われている。又、村々の祭りの時に祝女たちが馬の背にゆられながら村の祭場を巡行する民俗儀礼は現在でも各地で見ることができる。奄美の「のりがみのおもり」ではおもろ同様に黄金の鞍を掛け、美しい腹帯とあぶみで着飾った馬に祭祀者の祝女が乗ってミルヤ・カナヤのような霊力発源の地に旅たつことが謡われている。又、同じ奄美の「まれがたれ (生れ語り)」とよばれる歌謡においても霊力の更新のため聖域に馬に乗って行く神女のこと謡われている。これらのことは馬が単なる日常の乗り物でないこと、聖職者であるノロやユタとよばれるシャーマンが非俗的な聖なる他界に行き帰する場合に乗り物として使用されていたことをはっきりと示しているように思う。

神女による航海の歌が巻十三に数多く収録されているが、それらは実際の航海ではなく儀礼的世界の中で謡われてきたものであった。(中略) 船も馬も航海儀礼の歌において、霊力の発源する地への聖職者の乗り物として発想されていた。

この論で触れている奄美の「のりがみのおもり」と「まれがたれ」は、田畑・亀井・外間『南島歌謡大成Ⅴ 奄美篇』で見ることができのけれども、そこで謡われている馬は木馬ではなく本物の馬である。これらのことから、「あやきうま」・「くせきうま」を木馬と解釈するのは机上の空論に過ぎず、この「き」は毛と解釈するのが妥当である。ところがこの「あやき」と「くせき」において、毛が「き」で表記してあることを、中本正智氏が「どうも不自然だ。」とのべたり、『おもろさうしの国語学的研究』が「今後の検討を要する」例の中に挙げているのは、次の「するきほう」の解釈が明確でないからである。

③ するき (棕櫚毛)

けすおうねやす^きほうひ^(註7)きたて (巻十三790)

この790番オモロの「するきほう」には、「莛帆之事」という言葉聞書が付いている。そして『混効験集』に「するぎほう 莛帆之事」(坤・器財)とある。『混効験集』の「するぎほう」の「ぎ」の濁点は朱点。『混効験集』の朱点は、編集の最終段階の推敲で付けたものらしい(参照、島村幸一「『混効験集』オモロ語注と『おもろさうし』原注についての考察」)。

この「するき」を私が「前稿」で見落としていたのは汗顔の至であるけれども、諸家のこの語についての見解は以下のとおり一様でない。

『校本おもろさうし』の790番オモロの頭注には、「原注〔莛帆之事〕とある。するぎ(蒲)でおったむしろの帆。」とあり、『おもろさうし辞典』の初版にも同様の記述が見える。上記のとおり「するき」は『混効験集』にも見え、『混効験集 校本と研究』の索引にも、「するぎほう 坤・器財 スルギ帆 本文およびおもろ原注に『莛帆之事』とある。『するき』は蒲、『ほう』は帆。」とあり、外間守善『おもろ語辞書——沖縄の古辞書混効験集——』にも同じ記述が見える。

『おもろさうし全釈』は、「^する^ぎは^し」とし、『するぎほう』は、『混効験集』に『莛帆之事』とのべているが、一昔前までは実際に莛の帆が用いられていた。本例はシュロの木の葉で編んだ莛帆であろう。」と説明している。

『日本思想大系 おもろさうし』の頭注には「するき帆 棕櫚(しゅろ)木の毛で編んだ帆。」とあり、『おもろさうし辞典』の第二版でも「するき—ほう(するき帆) 『するき』とは棕櫚木のこと。スルギ(棕櫚の毛)で編んだ帆。」となっている。

『図説琉球語辞典』の「帆」の項には「するきほう」について、「『するき』とは棕櫚の皮のことだ。棕櫚皮で編んだ帆があったことがわかる。」と見える。

『おもろさうしの国語学的研究』は前述のごとく「するぎ(棕櫚木)」としていた。

『沖縄古語大辞典』は「しゅろげーほ【棕櫚毛帆】団 スルギ(棕櫚の毛)で編んだ帆。オモロ原注に『莛帆之事』(一三卷七九〇)とある。『混集』(坤・器材)にも『するぎほう 莛帆之事』とある。(中略) 語形 するきほう」とする。

以上の諸説を整理すると「するき」の解釈には以下の四つがあるわけである。

① 蒲 ② 棕櫚木 ③ 棕櫚毛 ④ 棕櫚皮

ここでまず確認すべきは、言葉聞書と『混効験集』に「筵帆」とあるけれども、「するき」は筵を直接に表す言葉ではないであろう、ということである。琉球方言の日常口頭語では筵は上代語のムシロ^(注8)に対応する語形である。例えば、『語音翻訳』(1501年)に「席子 mo-si-ru (多和田真一郎氏推定音価 [mUʃiru])」とある。歌謡でも『久米具志川間切旧記』(1743年)に「もしろ」(「まによく樽按司家建てのくわいにや」)とある。『沖縄語辞典』には「musiru むしろ(席)。」とあり、『今帰仁方言辞典』に「musu 筵。」と見える。

なお、『おもろさうし』には、以下のとおり筵を表す「みやし」という言葉が見え、この語について論及しておきたい。

あやのみやしうちよわちへ (巻十一596)

あやのみやしうちよちへ (巻十三777)

あやのみやしうちよち^(注9)へ (巻廿一1463)

777番オモロの言葉聞書に「筵の事」と見え、『混効験集』に「あやなみやし 御筵の事」^(注10)(乾・器財)・「あやのみやし 筵」(坤・器財)と見える。


『おもろさうし辞典』は「あやーの一みやし(綾の筵) 美しい筵。『混集(乾、器財)』に『あやなみやし』として『御筵の事』とある。」とし、『沖縄古語大辞典』には「みやし 団 筵。オモロ原注に『筵の事』(一三巻七七)とある。語形 まーし・みやし」と見える。

オモロ語の「みやし」を『おもろさうし全釈』と池宮正治「祭儀の時間」は「御拍子」と解すけれども諾いがたい。

「祭儀の時間」は「『うちよわちへ』の他の用例から」と述べる。確かに『おもろさうし』中に「ひやし うちちへ」(拍子を打って)」という用例は多い。しかし、例えば『今帰仁方言辞典』の「hucuN」の項には「⑤(むしろを)編む。織る。例 ムス～(むしろを編む)。」と見え、山内昌敬氏に確認したところ、／musu／(筵)を作ることを／musu hucuN／(筵を打つ)と言うのだそうである。このほか北琉球方言圏の島々で方法に多少の違いはあるものの、藺草の隙間をなくすために上から平行に圧力を加えて筵を作ることを「打つ」に当たる表現をすることを私は確認した。従って、「筵打ちよわちへ」(筵を打ちなさって)という表現を否定することはできない。「祭儀の時間」は「このおもろ一首全体の理解から言って」とも述べるけれども、一般論として、一首の意味から単語の意味を演繹することよりも、一単語一単語の意味から一首の意味を帰納することを優先すべきであろう。また「祭儀の時間」は777番オモロの例も御拍子であろうとするけれども、777番オモロで対句となっている「せりここうてうちよちへ」の「せりこ」についての池宮氏の解釈を知りたいところである。「せりこ」を『おもろさうし辞典』は「せりーこ 藺草。とうしんそう科の多年生草本。茎を筵または畳表とする。」とし、『沖縄古語大辞典』にも同じ記述が見える。そして

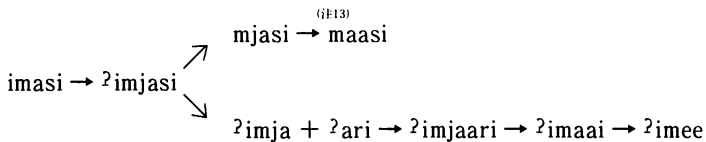
長田須磨・須山名保子『奄美方言分類辞典 上巻』(815頁)には「^(ie11)sjerixoシェリこ 'ii《シチトウイ》の古名》」という言葉が見える。「せりこ」が藺草であるならば、その対語の「みやし」は藺草で作るもの、すなわち蓆と考えるべきであろう。

この蓆を表すオモロ語「みやし」は奈良朝中央語のイマス(坐)の連用形イマシに対応する言葉であり、『沖縄語辞典』に「²imee (名) おいでになること。いらっしゃること。来ること・居ること・行くことの敬語。」と見える言葉につながるものであろう。

『沖縄古語大辞典』には「います【座す】 いらっしゃる。日本古語の『います』に対応する語であろうか。用例の『いみやし』『いみやち』は『いまし』『いまして』の変化した形。宮古方言にイミヤーチ(おいでになって)がある。《獄の ほうわい／もりの ほうわい／おろし ほうわい／いみやし ほうわい／ほうわい ほうわい》[固ミー五]」という言葉が見える。

『沖縄語辞典』によれば、「²imee」の動詞形は、「²imeeN (自・不規則)^(ie12) おいでになる。いらっしゃる。居る・行く・来るの敬語。同等や目上に使う。さらに上の敬語は ²meNseeN, ²imeNseeN, 目下の年長への敬語は meeNo。」である。敬意の度合いの高い方の語頭に／²i／が現れるのは、それが古形ゆえに丁寧な表現となると解釈できる。

仲宗根政善「宮古および沖縄本島方言の敬語法——『いらっしゃる』を中心として——」は、／²imeeN／を「いみーあり」に由来すると推定し、「その『いみ』は上代語の『います』や『往ぬ』などに関係がありそうに思える。」と述べるけれど、「往ぬ」との関係は音韻的にも意味的にも疑問であり、イマシから以下の音韻変化を経たのであろう。



／²imeeN／という動詞形は、首里方言の動詞の肯定普通態現在の「終止形」の末尾音がすべて／N／であることによる類推変化によって成立した語形であろう。

イマ>イミヤ>ミヤという音変化の裏付けとして以下の例を挙げ得る(参照、『おもろさうしの国語学的研究』136頁)。

いみや(今)『おもろさうし』巻五213他 > みや(今)『おもろさうし』巻二64他
 伊麻奇時利城『海東諸国記』 > みやきせん(今帰仁)『おもろさうし』巻五232他
 語中語尾のシの音の脱落例は琉球方言に少なくない。オモロ語の例を以下に示す。

むか(昔) ひが(東) はりや・はや(柱) あちや(明日)

オモロ語「みやし」は、「いらっしゃること」を「いらっしゃる場所」に転用し、貴人のいらっしゃる場所が蓆の上であることから蓆を意味するようになったのであろう。

閑話休題。「するき」に戻る。

「するきほう」を「蓆帆」だと盲信してはいけない。しかし、『おもろさうし全釈』に

「一昔前までは実際に筵の帆が用いられていた。」とあるごとく、かつての琉球で船の帆が筵であることは普通のことであった。^(注14)そして790番オモロにおいて「するきほう」は、以下のとおり「まぬのほう」(真布帆)の対語なのである。

又 あちおうねやまぬのほうはひきたて

又 けすおうねやするきほうひきたて

「まぬのほう」には「布帆の事」という言葉聞書がついており、『混効験集』にも「まぬのほう 布帆之事」(坤・器財)とあり、「まぬの」は『おもろさうし』中の他の用例からも「真布」であることは明かなので、その対語の「するき」の解釈は、筵帆の材料であり、布の対語としてふさわしいものという条件のもとに考えるべきである。久手堅憲夫氏によれば、首里方言では本来は備後蘭を意味する／bi:gu／という言葉がそのまま備後蘭で作った畳や筵を表すという。「するき」という言葉も本来は筵の材料となるものを表す言葉と考えてよいであろう。

その条件から上記の①②③④の四説を検討すると、真っ先に消去できるのは①である。

①の「蒲」はヒメガマのことである。『校本おもろさうし』の「解説」には、「本文および上段の注は、すべて仲原善忠により、」とあるから、「するき」＝蒲説は、仲原善忠氏の見解なのであろう。仲原氏は久米島の出身であったけれども、蒲は久米島の仲里村字比嘉では[kama]であり、首里の久手堅憲夫氏によれば／gamai:／(i:は蘭草の意)であるという。^(注15)蒲の現代琉球方言の語形からは「するき」という表記は考えられない。この「するき」＝蒲説の根拠を探る時、仲原善忠氏の弟であった仲原善秀氏の『久米島の歴史と民俗』に、「比嘉ムラの前方のスルギ原は、その名の通りスルギ草や蒲(カマ)の密生した沼地で、(後略)」(91頁)という記述があることに注目したい。久米島方言の[surugi]はカヤツリグサ科のヒトモトススキのことである(上江州清玄氏の教示による)。^(注16)久米島の方の話では、[surugi]はせいぜい掘って建て小屋の屋根と壁を葺くのに用いたことがある程度の使い道のない雑草であるというから、オモロ語の「するき」とは無関係と考えるべきである。「するき」＝蒲説は、蒲が筵の材料の一つであることと、[surugi]が蒲と同じ土地に生育していたことに基く、仲原善忠氏の勘違いから生じたものであろう。

②③④は「する」を棕櫚と解釈する点では共通であり、「き」をどう解釈するかが問題となるわけである。そして②③④は、「き」の言語としての解釈は異なるけれども、事物としては棕櫚の葉鞘の繊維を考えているという点で共通なのである。

そこで論証上必要な作業として、②③④の検討に入る前に、「するき」の「する」を棕櫚以外で解釈できないかと検討することにする。「するき」の解釈を決定する条件は整理すると以下の三つである。

- ①「するき」と表記されうる語形であること。
- ②筵として帆の材料になりうること。

③布の対語としてふさわしいこと。

その時、可能性の問題として『混効験集』の以下の記述に注目したい。

そろおしろひ そろと云事 和詞にも呉竹集にそろゐとは藺のいまだちいさを云とあり（坤・言語）

この「そろおしろひ」について、『混効験集 校本と研究』の索引の「そろおしろひ」の項には、「未詳語 伊波本注に、『おしろいの義不明。那覇の方言に、十四五才の少年にウシリーと云ふことあり、それか』とある。」と見える。

『混効験集』の記述は明晰ではないけれど、『混効験集』の編者は「そろ」を藺草と考えていたと読むことができよう。『沖縄古語大辞典』の「そろおしろひ 𪛗」の項が「未成年の子供、の意らしい。」とするのは、『混効験集』の記述と伊波本注を引用しているだけのことからして、伊波本注の記述に基づいた解釈なのであろう。しかし、伊波本注は「義不明」とした「おしろい」についての推測を述べているのであって、伊波普猷氏も「そろ」は藺草と解釈していたと考えるべきではなかろうか。

首里方言で蒲を／gamai:／と言うのは蒲を藺の一種と考えているわけではあるけれど、琉球列島では、藺草は普通は七島藺、別名、三角藺（カヤツリグサ科・和名シチトウイ）と備後藺（イグサ科・和名イ）の二つをさすらしい。そしてこの二つの藺草が琉球列島では筵の最も代表的な材料なのである。なお久手堅憲夫氏に七島藺と備後藺のほかに／gamai:／のように／i:／（藺）の付く植物名をお尋ねしたところ、思いつかないとのことであった。

『琉球列島植物方言集』と『図説琉球語辞典』の「藺草」の項、さらに宮良當壯『日本方言彙編(1)』の「937.藺」の項と「943.三角藺」の項を見るかぎり、「そろ」に対応する語形は見出せない。しかし本土方言に藺を表すソロないスルという言葉があったことは次の例からわかる。

藺 𪛗 キクサ スル （『観智院本類聚名義抄』僧上一七）

そろゐとは 𪛗 のいまだちいさを云 『呉竹集』

さらに『日本国語大辞典』に以下の項が見える。

そろーい ・ゐ《名》 植物「い（藺）」の異名。 ＊新撰六帖-二「道の辺にそろゐかりほす筵うちをのれかつかつ数かとぞみるく藤原信実>」

しかし、この藺を表すスル乃至ソロを「するき」の「する」に結び付ける必要はない。なぜなら、「するき」の「する」を藺と考えたと「き」の説明がつかない。少なくとも「き」は木ではない。『おもろさうし』において以下のとおり、藺は草であって木ではないのである。

しましりのいゝさに （巻一12）

このことから「するき」の「する」が藺であるとする、「き」は木ではないと言える。しかし藺草の一本一本を毛と呼ぶかどうかもおおいに疑問である。もっとも、仮に藺草の一

本一本を毛と呼ぶ方言がどこかにあって、「するき」の「する」が藺であるということになっても卑見には影響しない。「するき」の「する」が藺であっても、他の何かであっても「き」が毛であることが卑見にとって重要なのである。しかし、「するき」の「する」が棕櫚ではなく、藺あるいは他の何かであるという積極的な根拠は見出せない。

従って、「するき」の「する」は棕櫚と判断して、以下考察を進めて行くことにする。

㉞㉟㊱のうち、㊱「棕櫚皮」という説は表記の点から排除できる。『おもろさうし』では、皮は以下のとおり「かわ」と表記してある。

ひきやか[・]わさは（巻十四986） くろかわ[・]のよろい（巻廿1334）

北原白秋氏の短歌に「棕櫚の木に人攀ぢのぼり棕櫚の木の赤き毛をむく真昼なりけり」（『北原白秋全集第7巻』56頁）というのがあるけれど、ここにおいて「するき」の解釈は㉞「棕櫚木」と㉟「棕櫚毛」の岐路に立つ。そして先に「するき」の解釈を決定する条件として挙げた三条件の中で、①は棕櫚毛も棕櫚木も当てはまる。ここまでならば可能性（possibility）として棕櫚毛と棕櫚木は互角である。残りの②③の条件から検討すると、蒔にして帆にするとすれば、棕櫚の幹ではなく葉鞘の繊維に違いなく、真布の対語としても葉鞘の繊維の方がふさわしいであろう。従って「するき」は棕櫚毛である蓋然性（probability）が高い。

しかし、すんなり「するき」は棕櫚木ではなく棕櫚毛であるとは断定しにくい理由が琉球方言には存在するのである。棕櫚の葉鞘の繊維の呼称は、事物の認識と言語という観点からも興味ぶかい問題を提起する。『日本国語大辞典』を見ると、以下のとおり「棕櫚毛」と「棕櫚皮」とを区別している。

しゅろーがわ【棕櫚皮】棕櫚の幹を包む葉鞘（ようしょう）。黒褐色の繊維質で、棕櫚毛がとれる。

しゅろーげ【棕櫚毛】棕櫚皮からとれる黒褐色の繊維。耐水性があるところから、網・簾・たわしなどの材料とされる。

しかし、琉球方言で私の調査した範囲においては、棕櫚皮と棕櫚毛に当たる言葉の区別は一般的には存在せず、棕櫚の繊維の呼称は毛ではなく皮に当たる表現が圧倒的に優勢のようである。たとえば、『図鑑琉球列島有用樹木誌』の「シュロ」の項には、「木は観賞用として庭園に植栽するほか、葉鞘網（シュロ毛）採取用として畦畔・路傍などに植栽する。」と見えるけれども、この「シュロ毛」とは標準語を用いたものらしく、著者の天野鉄夫氏の出身地である沖縄本島国頭郡大宜味村字饒波の前田仲喜氏（1931年生）にお尋ねしたところ、棕櫚の葉鞘の繊維は[suruga:]（棕櫚皮）であって毛に当たる言い方はしないとのことであった。『今帰仁方言辞典』には「surugaa <棕櫚皮. 棕櫚の繊維. 縄をなったり、蓑を作ったりするのに用いられる.」とあり、与那嶺の山内昌敬氏にお尋ねすると、棕櫚の繊維は一本であっても/surugaa/（棕櫚皮）と言い、棕櫚毛に当たる言い方はしないと述べられた。この

他、私は、沖縄本島の各地で、あるいは沖縄本島各地の出身者に、棕櫚の葉鞘の実物をみせて呼称を尋ねたけれど、一様に「スルガー」（棕櫚皮）と言う回答であり、毛に当る言い方はしないかと尋ねても否定されるだけであった。このことは沖縄本島方言圏の中の最大離島である久米島でもまったく同様であった。

そして沖縄本島の北上にあり奄美方言圏に属する与論島の菊千代氏（1927年生、麦屋東区）にお尋ねしたところ、棕櫚は樹木としては [tʃigu] と言ひ、その繊維は [ho:]（皮）であり [tʃigu nu ho:]（棕櫚の皮）と言ひ、[ʃi:]（毛）とは言わないとのことであった。

与論島の北にある沖永良部島の日置ミネ氏（1908年生、和泊）によれば、棕櫚は樹木とその繊維の区別なく [tʃigu] と言ひ、その繊維の部分を [ho:]（皮）とか [hi:]（毛）と言うことはないとのことであった。

沖永良部島の北にある徳之島の井之川（宮崎福重氏1920年生、長島豊忠氏1930年生）では、棕櫚は樹木とその繊維の区別なく [soro] と言ひ、その繊維の部分を [ko]（皮）とか [kī]（毛）と言うことはないとのことであった。ただし、棕櫚の幹から葉鞘の繊維を取ることを [soro hagi]（棕櫚を剥ぐ）と言うとのことであり、[hagi]（剥ぎ）という言葉を用いるのは葉鞘の繊維を皮と認識していることを示すのであろう。

南琉球方言圏では、後述の多良間島以外は十分な調査を行っていないので、はっきりしたことは言えないのだけれども、参考までに宮古島平良方言と石垣島方言の例を示す。

平良方言では樹木としての棕櫚は [surukuba] と言ひ、その繊維は [ʃuru] 乃至 [suru] と言うらしい。私は平良出身で沖縄県立芸術大学で宮古方言を教えておられた古城源徳氏（1930生、沖縄本島在住）に、棕櫚の繊維を皮に当たる表現をするのか毛に当たる表現をするのか調べていただいたのだが、「毛と言うのか皮と言うのかなんともはっきりしない。」とのことであった。そして、私が1994年の八月に平良で宿泊したホテル・ニユー丸勝の御主人は「皮とも毛とも言わない。」と述べられた。もっとも古城源徳氏は「宮古でも [suruga:] とも言う。」と述べられたのだけれども、これは沖縄本島方言を移入したものだと思う。

石垣島方言については、『日本方言彙編(1)』に「棕櫚の皮 ʃuru-nu-ka: [石垣]」（603頁）とある。このこと石垣方言研究家の宮城信勇氏の確認を得（氏は棕櫚を [ʃu:ru] と発音した）、氏は「毛とは言わんであろう。」とお述べになった。

かくいう私は1961年に東京都に生れ、生後まもなく神奈川県川崎市に転居しそこで育ち、本論の調査にとりかかるまで棕櫚に無縁かつ無関心の生活をしてきた者である。その私にとって、たとえ棕櫚の葉鞘の状態であっても皮というのがピンとこず、なによりも一本でも皮と言う事実は不思議に思えた。

一方、『図説琉球語辞典』の著者である中本正智氏は沖縄本島に隣接した奥武島の出身であったため、恐らく氏は棕櫚の繊維はスルガー（棕櫚皮）であるという固定観念を抱いていたのであり、その固定観念が、氏に「するき」の「き」を毛と考えさせるのを阻んだのであ

ろう。

ところが、首里の久手堅憲夫氏は「棕櫚の繊維は一般的には／suruga:／であるけれども、子供のころ無意識に訛って／surugi:／と言うことがあった。」と述べられた。氏に「そのsurugi: の gi: は毛の意味ではありませんか。」とお尋ねすると、氏は少しのあいだ考えこんで「繊維の一本一本を言うわけではないよ。」とお述べになった。久手堅氏は「suruga: が無意識に訛って surugi: と言った。」と述べられたわけではあるけれども、首里方言の音韻体系において／suruga:／～／surugi:／という音の揺れは考え難く、／surugi:／は恐らく棕櫚毛の意味なのであろうと私は思うけれど、もはや久手堅氏の記憶の中では曖昧になってしまったのであろう。沖縄本島方言圏においては、棕櫚の繊維の呼称がスルガー一辺倒の中で／surugi:／と言うこともあったという久手堅氏の証言は貴重である。

しかし、この久手堅氏の証言を根拠にしてオモロ語の「するき」を棕櫚毛と断定することはできないと思う。オモロ語の語彙の性格を考える上で示唆ぶかい論を以下に示す。

「くるまがさ」と云ふのは、この「車蓋」の訳語であらう。この語は国語には出て来ない事も注意される。

仍て考へられる事は、おもろには、各地方の民謡に比すべき田園の即興もあると共に、堂上の知識人による入念の作品もあつたであらうと云ふ事である。この事は桜についても云へる。

東恩納寛惇「くるまがさ」

おもろは、すでに十五世紀を頂点として衰運に向い、人々の歌謡的意欲はすでに、三味線歌にかわっていた。

おもろ用語は、当時の日用語ではなく、好んで古語を用い、おもろ時代の末期には、すでに一般人には不可解のものとなっていたはずである。

仲原善忠『おもろ新釈』（『仲原善忠全集第二巻』121頁）

祭りの庭でうたわれる神歌オモロが「好んで古語を用い」たのは、何ら怪しむに足りない。古語の使用は、その歌に神秘的な権威づけをするためにも必要であっただろう。歌謡には俗謡と公的な祭式歌の別があり、古老だけしかしらぬ古語や雅語がとくに後者には頻用されるということが他の民族にかんしてもいわれているが、宗教性の強いオモロではこの傾向がとくにいちじるしかったといえるだろう。

西郷信綱「オモロの世界」（『日本思想大系 おもろさうし』収録）

ここ【『おもろさうし』——引用者】に書かれた言語が、その当時の口頭言語と同じとすることは出来ないであろう。「祭式歌謡共通語」といったものがあつたのかも知れない。ともかく、その性格からして、記録された時よりも以前の言語を反映していると考えられる。

『おもろさうしの国語学的研究』2頁

久手堅憲夫氏が子供のころ無意識に使った／surugi:／という言葉は、典型的な日常の口頭言語であり、祭式歌謡の言語の解釈にストレートに導入するのは危険である。しかし、久手堅氏の証言は首里の人間も棕櫚の繊維を毛と認識しうることを示す点で貴重である。

この他に、棕櫚の繊維を毛に当る表現でいう地域を現在私は三地点で確認している。

喜界島上嘉鉄の住友常正氏によれば、棕櫚は樹木もその繊維も共に [suru] と言うが、樹木としては [suruhi:] (hi:は木) 乃至 [surugi:] (gi:は木) とも言う ([suruhi:] と言うことの方が多) のことであり、その繊維は [higi] (毛の意でヒ甲ゲ乙に対応) であり [suruhigi]・[suruNhi:]^(jE18) と言ひ、[ka:] (皮) とは言わないとのことであった。なお、上嘉鉄でキビ刈りの準備をしていた年配の三人連れの御婦人方に棕櫚の繊維の実物をお見せして呼称をお尋ねしたところ、「それだけで [suru] と言うんです。」とお述べになった。

奄美大島瀬戸内町油井の起多継央氏 (1923年生) によれば、棕櫚は樹木としては [t'ik] ないし [t'ikgi:] (gi:は木) であり、その繊維は [t'ik]・[t'ik nu k'i:]・[t'ik nu hi:]^(jE18)・[t'ik nu k'o:] のいずれの言い方もするという ([higi] と [k'i:] はともに毛の意で、[higi] はヒ甲ゲ乙に対応。[k'o:] は皮)。ただし、同じく油井の瀬本好氏 (1926年生) は、棕櫚は樹木としては [t'ikgi:] であり、その繊維は [t'ik] であって毛や皮に当たる言い方はしないと述べられた。

多良間島では、棕櫚は樹木としては [tsrukuba]^(jE19) 又は [surugi:] (gi:は木) と言ひ、その繊維は [aka]^(注20) (頭髮) と [plgi] (毛の意でヒ甲ゲ乙に対応) と [furu] とも言うとのことであった。

これらにより琉球方言では棕櫚の葉鞘の繊維の呼称は皮であって毛ではないとは言い切れないことが解る。しかし首里方言の／surugi:／に加えて、喜界島上嘉鉄方言や奄美大島油井方言そして多良間島方言の例を根拠にしてオモロ語の「するき」を棕櫚毛と断定することもできないと思う。

『図説琉球語辞典』の「毛」の項を見ると、「ヒゲ系は宮古に集中し、奄美大島・喜界島にもみられる。ヒゲは本来、髯を表していたのだが、意味が推移して毛一般を表すようになったものである。」とある。棕櫚の繊維を毛で言う方言が、まさしくこの毛をヒ甲ゲ乙の対応形で言う方言であることに注目したい。

けだし、毛をケ乙の対応形で言う方言においては、まさに木と毛が同音であるそのことによって、「棕櫚毛」は「棕櫚木」と同音衝突を起こしてしまうので避けられたのであろう。ゆえに喜界島上嘉鉄・奄美大島瀬戸内町油井・多良間島で棕櫚の繊維を毛でいうのは毛をヒ甲ゲ乙の対応形で言うようになったことを支えにして成立した比較的新しい表現であろう。そうであるとすれば、オモロ語では毛はケ乙の対応形である「け」なのであるから、「するけ>するき」(棕櫚毛) という語形が存在した蓋然性は低いということになる。

ただし厳密に言うと、『おもろさうし』にはヒ甲ゲ乙の対応形が表れないからオモロ語での

ヒ甲ゲ乙の対応形の意味は不明である以上、奄美大島の油井で毛を表す言葉としてケ乙とヒ甲ゲ乙の対応形が共存している事実を考え合わせると、オモロ語で毛にケ乙の対応形が見えるだけでは、棕櫚の繊維を毛ではなく皮と言ったはずであると断定することは出来ないことになる。参考として、『沖縄古語大辞典』で「ひげ【髭】 圃 フィジ」の項を引くと、以下のとおりの記述が見える。

- ①髭。『琉球館訳語』に「胡子 品乞」、『音韻字海』に「鬚 品其」「鬚子 胡品其」、
『中山伝信録』に「鬚 非几」とある。《はなの お話や 城内も 御免 ひげの お話や 天下 法度》〔圃 全二八一七〕 ②気根。木の細根。ひげ根。《手さじの 長さや なげ 長さ 庭に 植ゑてる がじまるの ひげの 長さ》〔圃 全一三二四〕

この語釈は、『沖縄語辞典』の「hwizi ㊦ひげ。㊦植物のひげ根。」、『今帰仁方言辞典』の「πizii ①ひげ。②草木の根。気根。」という記述と合致するものである。

ここで逆に、「するき」は棕櫚木ではないかと考察してみよう。

実は沖縄本島出身の人の中には「棕櫚は木なのだろうか。ヤシ科の植物はヤシなのであって木とは言わないのではなかろうか。」と述べる人がいる。このような考えが出てくる背景には、現在の沖縄本島方言では、樹木としての棕櫚の呼称は『混効験集』に「つぐ 棕枳之事」(坤・草木)と見える言葉に対応する語形が一般的であることもあるのかも知れない。『沖縄語辞典』には「sjuru 棕枳(しゅろ)」と「^(注21)çigu しゅろ(棕枳)」という二つの言葉が見えるけれど、久手堅憲夫氏によれば樹木としての棕櫚の呼称は／cigu／であるとのことであった。『今帰仁方言辞典』には「ciguu 棕枳、スルーともいう。」とあるけれども、山内昌敬氏は樹木としての棕櫚の呼称は^(注22)／cigu／であると述べられた。

しかし樹木としての棕櫚を木を表す形態素を付けて言う方言は、上述の喜界島上嘉鉄と奄美大島瀬戸内町油井そして多良間方言以外にも以下のとおり存在する。

『琉球列島植物方言集』は著者の出身地の饒波方言の棕櫚をチグと記しているけれども、饒波の前田仲喜氏によれば、樹木としての棕櫚は[suruga:gi:](棕櫚皮木)とも言うとのことであった。

久米島の仲里村比嘉でも、棕櫚の葉鞘の繊維は[suruga:]であり、樹木としての棕櫚は[tfigu]とも[suru]とも[suruga:gi:](棕櫚皮木)とも言うとのことであった。

琉球列島において少なくとも敗戦直後までは、棕櫚は観賞用の植物ではない。その葉鞘の繊維がすぐれた耐水性により簀や縄の材料として人々の生活にとって極めて重要な植物であった。そのことから、樹木としての棕櫚を明示する言葉として、棕櫚の繊維をあらわす言葉に木を表す形態素をつけた言葉が生れたのであろう。

現代の沖縄本島方言で樹木としての棕櫚をあらわす言葉が、『混効験集』の「つぐ」の系統の言葉であるのも樹木としての棕櫚の呼称とその繊維の呼称を峻別しようとする意識の反映なのではなかろうか。久手堅憲夫氏によれば、棕櫚製の簀は／suruNnu／(棕櫚簀)、棕

欄製の網は／suruzina／と言うとのことであり、沖縄本島方言でも「する」だけで棕櫚の繊維を表していたことがあったことが窺われる。さらに徳之島の [soro]、喜界島の [suru] が棕櫚の樹木と繊維の両方を表すことを考え合わせても、沖縄本島方言でも「する」だけで樹木としての棕櫚とその繊維の両方を表していた時期があったことは容易に考えうる。樹木としての棕櫚とその繊維の呼称を峻別しようという意識が起きた時、繊維を皮と明示的に述べたならば、樹木としての呼称は「する」に木を付けた「するけ」(棕櫚木)でもよかったようであるけれど、「するけ」は棕櫚毛とも取れてしまうから、中国語から「つぐ」を取り入れたということではあるまいか。

この推定の是非はともかく、琉球方言では、「棕櫚木」に当る語構成の言葉は、棕櫚の繊維そのものを指すのではなく、樹木としての棕櫚を指す時に使う言葉と限定できよう。もちろん、私の調査した地域は限られたものであり、何よりもオモロ語の「するき」は過去の言語、それも祭式歌謡という特殊な文体の言語である。しかし、「棕櫚木」に当る言い方が、棕櫚の繊維の部分を目指す言葉ではなく、樹木としての棕櫚を指す言葉であることは、当たり前といえあまりに当り前のことであるからこそ、汎時的かつ普遍的なことと考えることができよう。

ここまでの考察を「するき」を棕櫚毛または棕櫚木と解釈する場合の双方の難点という角度から整理すると以下のとおりとなる。

○棕櫚毛と解釈すると、オモロ語では毛の確例はケ_乙の対応形なのだから、毛をケ_乙の対応形でいう方言では棕櫚の繊維を皮と呼ぶ琉球方言の一般的傾向に反することになる。

○棕櫚木と解釈すると、それは樹木としての棕櫚を表す言葉のはずであり、葉鞘の繊維を表しているオモロの文脈に合わない表現となる。

双方の難点を見比べた上で「するき」の解釈を判断するなら、「き」を毛と考えるべきことと明かである。オモロ語には、漢語「車蓋」の翻訳語である「くるまかさ」を典型とする、琉球方言の日常の口頭言語では用いない言葉がすくなくないのであり、棕櫚の繊維を琉球の日常の口頭言語では皮と言う傾向は、「するき」の「き」を毛と解釈することの障害にはならないのである。

ここで注意すべきは、木と毛が同音の方言では棕櫚の繊維を「毛」というのを避けた理由が「棕櫚木」との同音衝突を避けるためであったということは、とりまなおさず、棕櫚の繊維を毛と認識していたことを示すと解釈できる。なぜなら、棕櫚の繊維を毛と認識し得ないならば、「棕櫚木」という語形を「棕櫚毛」と間違えることはないはずであるから同音衝突は起こりようがないのである。とはいえ、喜界島上嘉鉄・奄美大島油井・多良間島で棕櫚の繊維を毛というのは、毛をヒ_甲ゲ_乙の対応形でいうようになってからの比較的新しい表現と先に推定したけれども、さらに古くは琉球方言でも棕櫚の繊維を一般にケ_乙(毛)に対応する表現をしていた時代があり、オモロ語「するき」はその化石であると解釈するならば、そ

れは恣意的であり、オモロ語で棕櫚の繊維を「するかわ」（棕櫚皮）と言わずに「*するけ>するき」（棕櫚毛）という言葉を用いた理由は、対語が三音節の「まぬの」なので、三音節の「*するけ>するき」を用いたという音数律上の要請に帰すべきであろう。

「するき」の「き」を毛と解釈することにより、895番オモロの「あやきうま」・「くせきうま」の「き」を毛と解釈する障害はなくなった。

「あやきくら」・「くせきくら」の「き」を木と解釈することは、「クギグラ シタ ティヤイ 桑木の鞍を用意して」（「大城ごゑな」玉栄清良『平敷屋朝敏の文学（再版）』337頁）等の例から問題ない。

また、『沖縄古語大辞典』の「あやけーぶち【綾木鞭】」の項は「木製の鞭は不詳。修辞の上のことか。」と述べているけれども、「ふち」（鞭）の修飾語が「あやき」（綾木）・「くせき」（奇せ木）なのは音数律上の要請だと思う。『沖縄古語大辞典』には「むち【鞭】 園ムチ 鞭。竹などの細長い棒を用いる。首里方言ではブチという。」と見えるけれども、二音節語の「たけ」を用いた「あやたけふち」・「くせたけふち」という表現では、対語の「あやきうま」・「あやきくら」・「くせきうま」・「くせきくら」と音数律が合わない。もっとも、『沖縄古語大辞典』の「だけーうま【竹馬】 園ダキンマ」の項の「手ごろな竹や木、二本に足をのせる台をつけ、それに左右の足をのせて立ち、手で竹をもって歩くもの。（中略）タカビサー（高足）、キービサー（木足）ともいった。」という記述も考え合わせると、竹を木の一種と見なした表現とも解釈し得る。

以上、『おもろさうし』における木と毛の表記を整理すると以下のとおりとなる。

A 木を「け」で表記したもの

「くわけ」・「くねふけ」・「こかねけ」・「よかるけ」・「きやきやるけ」・「しらけ」・「きよらけ」・「うへ（ゑ）け」

B 木を「き」で表記したもの

「くすぬき」・「あかき」・「ゆ（よ）すき」・「あやき」・「くせき」

α 毛を「け」で表記したもの

「わしけ」

β 毛を「き」で表記したもの

「あやき」・「くせき」・「するき」

そして、木を「き」で表記したとされる例のうち、「くすぬき」は本土方言からの移入語と認め、「しとき・しちよき・しちようき」の「き」は不明とした。

Ⅳ 琉球方言のケ>キ・キ>チの変化の発生時期

これまでの考察により、『おもろさうし』において木と毛それぞれに「け」と「き」の表記が存在することを確認した。これは琉球方言におけるケ>キの音韻変化の発生時期を推定

する上で重要な資料である。そして服部四郎「日本祖語について・6」が説くごとく、ケ>キの変化とキ>チの変化とが同時進行で起きたのでなければ、現代京都方言のケに現代首里方言の／ki／[ki]が対応し、現代京都方言のキに現代首里方言の／ci／[tʃi]が対応するという現象はあり得ないから、ケ>キの音韻変化の発生時期を明かにすることは、同時にキ>チの音韻変化の発生時期を明かにすることとなり、琉球方言研究上の重要な問題ゆえに、以下その発生時期について考察することにする。

文字の書き分けは、音の対立を窺う手がかりとはなるけれども、かならずしもそのまま対立を反映はしない。近年の研究では、『おもろさうし』の表記は、平仮名を音声記号的に用いた極めて表音的な表記ということが明かになってきた。しかし『おもろさうし』の表記に正書法的意識が存在することも否定できない。例えば、『おもろさうし』では四つ仮名を混用する中で、現代首里方言で／²aNzi／または／²azi／と発音する按司を『おもろさうし』では「あんし」または「あち」と表記するけれども、「あんち」または「あし」と表記した例はない。そこで問題となるのが水の表記である。『沖縄古語大辞典』は「みづ【水】」という見出しを掲げるけれども、水は現代琉球諸方言の比較研究により琉球方言の祖形は／*midu／ではなく／*^(注24)medu／であることが既に判っている。然るに『おもろさうし』では、水は「みつ」(巻五283)のほか各巻にまたがり「みつ」で表れ、「めつ」の表記は^(注25)ない。この「みつ」はメ>ミの音韻変化を反映した表音的な表記の可能性もある。しかし、水を「みす」と表記した例も皆無であることから、そこに正書法の意識を読み取ることが出来る。そして水は十六世紀の金石文でも以下のとおり「みつ」と表記してある。

くすくとみづのかくこのために一はんのさとぬしへ (石門の西のひのもん 1522年)

ねたてひかわのみづのかくこは (やらさもりくすくの碑 うらの文 1554年)

雨ふる時はとろつちみづのふかさあるけに (浦添城の碑 おもての文 1597年)

『琉球国碑文記』(伊波本)より引用。

これら金石文は和文に琉球方言を混ぜたものであるから、金石文の「みつ」という表記は本土方言の表記を取り入れた可能性がある。ならば『おもろさうし』の「みつ」という表記も本土方言の表記法を取り入れた可能性もあると私は思っている。したがって、木に「け」と「き」の双方の表記があるというだけならば、琉球方言で木が／*ke／にさかのぼる以上、「け」は表音的表記であり、「き」は本土方言の木の表記法を取り入れたものという可能性を否定できない。しかしながら、毛を「け」で表記する例とともに「き」で表記している例があることは、そこにエ段音からイ段音への変化が反映していると考えるべきである。木と毛を「き」で表記した例が表われる巻十と巻十三の表紙は共に「天啓三年癸亥三月七日」という日付を記している。ケ>キの変化の時期がこの天啓三年すなわち1623年までに遡るものかどうかを考察する時、『おもろさうし』の成立論を一新した池宮正治氏の警告に耳を傾けなければならない。

『おもろさうし』の編纂・成立は、未知のことが多く、また採録編纂の過程も島津入りを挟んで平坦ではなかった。それも一七〇九年の王城火災によって炎上し、今日のテキストは、王府が「回文」を発して各家から収集して大急ぎで再編集したものであった。今後の研究はこうした点を念頭に置かなければ、砂上に楼閣を築くことになりかねない。

(「王と王権の周辺 — 『おもろさうし』 にみる —」)

池宮氏のこの警鐘は、『おもろさうし』の言語の研究においても当然念頭に置かなければならない。あるいは言語の研究の面でもっとも念頭に置かなくてはならない。つまり私たちの前にある『おもろさうし』が1710年に再編集されたものである以上、その言語には1710年の琉球方言が投影されている可能性を考慮しなければ、その研究が砂上の楼閣になる可能性が大である。

そして、『おもろさうしの国語学的研究』が「け」と「き」の混用例として挙げる「てるきしやけ」(巻一16)と「てるきしやき」(巻七367・巻十三784)は、『沖縄古語大辞典』の「てるきしやき【照るきしやき】団 神女名。「きしやき」の原義は未詳。語形 てるきしやき・てるきしやけ」という記述からわかるとおり、どちらが原形か不明である上に、「てるきしやけ」の表記が孤例なのであるから、再編の際の語写である可能性を否定できない。木と毛の表記にしても巻十535の「あかき」・「よすき」を除けば、木と毛を「き」で表記した確例は巻十三にしか見られないのであるから、本来「け」で表記してあったものを1710年の再編の段階で「き」に書き替えてしまったのではないかと疑ってみる必要がある。そもそも十八世紀初頭に成立した『女官御双紙』(1706～1713年の間に成立)や『琉球国由来記』(1713年成立)では、以下のとおりアカギと柞をそれぞれ「あかけ」・「ゆ(よ)すけ」と表記している。

あかげばやかいなで、よすげばやついたて、
あかけばやかいなで、よすげはやいて立て

(「伊瀬名浜にてのみせ、る」『女官御双紙』)

このミセセルは『琉球国由来記』の巻十六にも以下のとおり収録されている。

アカケバヤカイナテ、 ヨスケハヤツイタテ、
アカケハヤカイナテ、 ヨスケハヤツイタテ、

そして『琉球国由来記』巻十七の渡名喜島のウムイに以下の例が見える。

アカケヲヤコ ツクツク ユスケヲヤコ ツクツク

(「麥粟穂祭ノ時根カミ出砂へ罷渡時分海上ニテ御唄」)

十八世紀初頭の琉球方言では、ア行・ハ行・ワ行以外でもケ>キをはじめとするエ段音とイ段音の合流が起きていることは、『琉球国由来記』等を資料にして、『おもろさうしの国語学的研究』の「第六章 『おもろさうし』 以後の言語 第一節 十八世紀初期の音韻」が明らかにしているから、『おもろさうし』で木と毛を「き」で書いた例は1710年の再編の際に

「け」を「き」と書き替えてしまったものである可能性を検討しなくてはならない。

その時、「するき」が『混効験集』に見えるということが重要な意味を持ってくる。嘉手苅千鶴子「『おもろさうし』書き改めと『混効験集』編纂について」は、『混効験集』の編者が坤巻でオモロ語を採集した『おもろさうし』は、1710年再編以前の『おもろさうし』であることを明かにした。「『おもろさうし』書き改めと『混効験集』編纂について」によれば、『混効験集』の「するきほう」は、再編『おもろさうし』巻十三の原資料の一つである『嘉靖三十二年やらさもりまうはらいときみま物のみ御前みせゝる御双紙』からの引用である。従って「するきほう」は1710年再編以前の『おもろさうし』に既に存在した表記であり、ケ>キの音韻変化が生じたのは、『おもろさうし』の巻三以下が初編された1623年にまでさかのぼる貴重な証拠と言える。しかし、『混効験集』の編者が「するきほう」を引用した『^(註26)嘉靖三十二年やらさもりまうはらいときみま物のみ御前みせゝる御双紙』にしても、数度の書写を経たものである可能性があるから、この「するき」を重く見すぎてはならない。

ここで微視的にキとケだけを見るのは止めて、音韻の体系的観察という見地から、ウ段音とオ段音の問題も併せ探ろう。

『おもろさうし』において、柞は「よすき」と「ゆすき」の両表記が存在する。「よすき」の「よ」の表記が問題である。柞は本土方言の資料では以下のとおりユス（ノキ）として現れる。

「柞 和名由之」（『二十卷本和名類聚抄』）

「Yusu. |, Yusunoki. ユス, または, ユスノキ (柞, または, 柞の木) 木質の堅いある樹木.」（『邦訳日葡辞書』）

「柞 ユシ ユス」（『書言字考節用集』）

これを見ると、「よすき」・「よすけ」の「よ」の表記は奇異に見える。ところが、18世紀に琉球王府が発した森林法令でも以下のとおり柞を「よす」と表記している。

かしの木よすの木は大小共伐取儀堅禁止申付候 （『山奉行所規模帳』1737年）

附椎木よす木仕立様同断候 （『樹木播植方法』1747年）

一 よす 一 かし木 一 いちよ丸きち （『山奉行所公事帳』1751年）

上杉家文書『沖縄県日誌』巻二十より引用（巻頭に明治十八年写とある）。

ここから、琉球では柞を「よす」と表記するのが規範的表記であったことがわかる。勿論これだけでは表記上の問題であって、／josu／という語形が実在したことの証拠にはならないけれども、「よす」を規範的表記と認めるからには、何らかの根拠が存在したと考え得る。そして『おもろさうしの国語学的研究』（118頁）が『おもろさうし』ではユとヨにとりわけ混同例が多いことを指摘していること、さらに橋口満『鹿児島県方言辞典』に「ヨシ〇ノキ 柞。いすのき。イスノキ（柞）の転訛。④^(註27)薩（里）。」と見えることを考え併せると、かつて琉球方言には、柞に／jusu／はもちろん／josu／という語形も実在したことを考え得

る。そして前掲のとおり『女官御双紙』と『琉球国由来記』には「よすげ」が現れていた。それと同時に『琉球国由来記』には、「ユスケ」も現れていた。これは、祭式歌謡という文体において、初編『おもろさうし』以後の80年以上にわたり、柞の語頭拍にはヨとユの二つの音が共存していたことを示す。ならば、語末の木の部分も、ケとキの二つの音が共存していて、『おもろさうし』の場合には偶々「き」の方だけが現れていたと考えることが出来る。

なお巻十三に木と毛を「き」で書いた例が集中する理由は以下の二つであろう。

①『おもろさうし』全廿二巻1554首の中で、巻十三は236首を占める際立って歌数の多い巻であるから語数も多い。したがって確率的に例外的現象が存在しやすい。

②武藤美也子「『おもろさうし』における植物考」が指摘するとおり、『おもろさうし』の語彙中、植物名が巻十三に集中しているという事実がある（『『おもろさうし』における植物考』は「するきほう」を「棕櫚で編んだ筵帆のことであろう」としている）。

そして音韻の体系的観察という見地からより重要なことは、ケ>キの変化が起きているならば、同時にキ>チの変化も起きているはずであるということである。

『沖縄古語大辞典』の「解説篇」の「I 音韻」の「二 子音」の項には、以下の記述が見える。

② カ・ガ行

「き」「ぎ」は、『おもろさうし』ではキ、ギと発音されていたが、その後、規則的にチ・ヂに変化する。カ行拗音はすでに『おもろさうし』時代にチャ・ヂャに変化していた。

○来給う（「来おはる」に対応）…ちよわる／cjowaru／〔㊦〕

○美しい（「清ら」に対応）…ちよら／cjura／〔㊦〕

これは概論と受け取るべきものとして、詳論と評すべき『おもろさうしの国語学的研究』の「第二章 音韻詳論 第四節 口蓋化」では、拗音キャ・キョ・キュの口蓋（破擦）化以外にキ>チの変化が起きた確例として巻十二723の「ふさちん」（稲の穂）を『琉球国由来記』巻十六等の「フサキン」の変化形として挙げる（138頁）。ただし、「第二章 音韻詳論 第一節 表記法と音韻」では、「キの破擦音は特殊な音環境にしか生じていない。」例の一つにこの「ふさちん」を挙げ、キの次に撥音が来ている点を「特殊である。」（58頁）としている。

『沖縄古語大辞典』は「ぼさつーのーほ【菩薩の穂】」の項でこの二語を用例として挙げており、「ぼさつーのーほ」を古形と考えるならば、『琉球国由来記』の「フサキン」はともかく、『おもろさうし』の「ふさちん」はキ>チの変化例ではなく、ツ>チの変化例ということになる。そもそも「ふさちん」は孤例であることから、1710年の再編の際の誤写ではないかと警戒する必要がある。

また『おもろさうしの国語学的研究』の「第二章 音韻詳論 第四節 口蓋化」が、キ>

チの変化例か「判断に苦しむ所である」(143頁)とする二例のうちのひとつとして「やまき」(巻廿1337他)を挙げ、「人名(地名からとったものと思われる)なので、はっきりしない。今の所、『山内』の地名はあるのに対して、『やまき』という地名は見つかっていない。」とするけれど、『角川日本地名大辞典47 沖縄県』が「やまき やまきく糸満市>」の項で「『おもろさうし』に見える地名。糸満いとまん市山城やまぐすくのうち。(中略)やまきという地名を想定してよいと考えられる。」(702頁)とし、『沖縄古語大辞典』の「やまき【山内】」の項はこれに従っている。

『おもろさうしの国語学的研究』が「判断に苦しむ所である」とするもう一例の「きりさへ」(巻三97)を、『沖縄古語大辞典』は「ちりーさび【塵錆】」の項で「ちりさひ」(巻五242)と共に示している。しかし、「きりさへ」は『おもろさうしの国語学的研究』(142頁)が、「ビを『べ』と表記しているのは、『おもろ』においてべとビの仮名は区別されている中であって、大変珍しい例なので、少し疑問が残る。」とすることからわかるように、「へ」の表記の方にも疑問のある例なので、後考を待ちたい。そして「きりさへ」の表記も孤例であることが問題である。

さらに、『おもろさうしの国語学的研究』の「第二章 音韻詳論 第一節 表記法と音韻」が「きりさへ」と共に「類推仮名遣い」がどうか「今後検討する必要がある。」(58頁)とする例に、「おいみき」(巻十一564・巻廿一1416)がある。「おいみき」は『おもろさうし辞典』には「おいーみき(上道)親道か。城門に通ずる道の美称であろう。『みき』の『き』は『ち』のおもろ表記。」とある。『おもろさうしの国語学的研究』の「第二章 音韻詳論 第四節 口蓋化」では、「おいみき」を「『御』+『いみき』(土地の靈気)の可能性もある。」とし、『沖縄古語大辞典』では「おいみき 団 未詳語。親道か。」となっており後考を待ちたい。

なお『おもろさうしの国語学的研究』(142頁)が「歯口」説と「歯茎」説を併記する「はくき」(巻十四986)は、池宮正治『沖縄ことばの散歩道』(81頁)が『梁塵秘抄』の「四十の齒ぐきは冬の雪」(巻第二仏歌)を根拠に「歯並」であるとするのを支持すべきであろう。『沖縄古語大辞典』の「はーぐき【歯茎】団 団 団ハゲチ」の項が「口もと。歯並び。」とするのもそれに従ったものであろう。

このように検討して行くと、少なくとも1710年の再編以前の『おもろさうし』にカ行拗音以外でキ>チの変化を反映したと見るべき確実な例はないことになってしまう。けれど、さらに詳しく『おもろさうし』を見て行くと、果せるかな、奈良朝中央語のキ(酒)の対応形を以下のとおり「ち」で表記している。

又 なつはしけちもる 又 ふゆは御さけもる (巻十二671)

仲吉本のこのオモロの「しけち」には「神酒なり」という言葉閒書が付いている。「しけち」はこの他に『おもろさうし』中に11例(巻八448・巻十一643・巻十三962・巻十四1025・巻

十五1069・1092・1119・卷十六1161・卷十七1180・1225・卷十八1255) 見える。

『混効験集』にも以下のとおり見える。

しげち 酒の事

天啓三年癸亥三月七日船多とのおもろ御双紙に見えたり (坤・飲食)^(注29)

『おもろさうし辞典』は「しけーち (神酒) 『しけ』は聖なるの意で、『ち』は『き (酒)』。」とし、『おもろ語辞書——沖縄の古辞書混効験集——』の「しげち」の項には「神酒。『しげ』は聖なるの意で、『ち』は酒である。」とあり、『沖縄古語大辞典』は「しげーき 【しげ酒】 団 園 シギチ 神酒。酒。『しけ』は聖なるの意で、用例の『ち』は『き』で酒のこと。」とする。

『混効験集』が「しげち」を採集した『天啓三年癸亥三月七日船多とのおもろ御双紙』とは、『おもろさうし』書き改めと『混効験集』編纂について』によれば、再編にあたり卷十三の原資料のひとつとなった『おもろさうし』である。ここから、再編『おもろさうし』の原資料に「しけち」とあったことが判る。その上「しけち」が各巻にまたがり十二例あることを考え合わせると、『おもろさうし』の卷三以下の初編の天啓三年 (1623年) の時点で「しけち」という表記があったと考えるべきである。『おもろさうしの国語学的研究』が「しけち」に言及していないのは高橋俊三氏看過したか。

ところが、「しけち」の「ち」をキの変化形と考えることに對して、池宮正治「酒と土地と太陽的人物」が以下のとおり懷疑を表明している。

問題は「ち」である。はたして「き」の口蓋化したものかどうか、酒を意味する「き」は「みき」の形で多出し、これらの表記に「みち」の例はないし、他の「き」の場合も口蓋化要素が前接後接しないかぎり一般に「き」は「ち」と表記されない。現在のところ私はこの「ち」についてまだ定まった考えがない。

確かに、ミヤキマ (神酒) の対応形は『おもろさうし』では「みき」と表記してあり、「しけちまみきもりや」(卷八448)のごとく、「しけち」と「まみき」が続いて現れる例などを見ると、「しけち」の「き」が「みき」の「き」と同じ奈良朝中央語のキ (酒) の対応形なのか疑わしくなってくる。「しけち」の「ち」が「き」の破擦 (口蓋) 化したものならば、「しけき」という表記も一例ぐらいあってもよさそうであり、「酒と土地と太陽的人物」の提出する疑問には説明付けが必要であろう。

ここで私は、「みき」と「しけち」とでは、酒の意味の形態素とその前部の形態素 (み・しけ) との合成度の強弱に相違があったであろうことに注目したい。

「みき」の語構成は「み (御)」+「き (酒)」ではあるけれども、「みき」は448番オモロのごとく接頭語「ま」の付いた例 (他に卷十四1035・1043・卷十六1172) と接頭語「よ」乃至「ゆ」の付いた例 (「ゆみきもりところ」卷十541・「よみきもりところ」卷十三957・「世みき」卷廿一1468)、さらに接頭語「大」の付いた例 (「大みき」卷十五1105・卷十七1198)

があることから、「み」と「き」は密着し、「神酒」を表す二音節の単純語化（一単位化）していたと推定できる。「御＋き」という語構成の意識は残っていたとしても極めて希薄であったろう。久手堅憲夫氏によれば現代首里方言では神酒は／mici／であって／mi／を付けない言い方はしないという。

なお「みきい」（巻十五1087）という表記がある。『おもろさうしの国語学的研究』によれば、「本土の一音単語に対応する語は、今日と同様に長音であったらしい。（中略）これらは、次のように複合した時も、長母音はそのまま残る傾向があったようである」（46頁【傍点引用者】）ということになるものの、「みきい」は『おもろさうしの国語学的研究』（47頁）が「当時の言語の音韻とは無関係で、歌唱の際、延ばした」音とするのに従うべきであって、「き（酒）」が一音節語の時の長音の状態を保持しているものと見るべきではない。

一方「しけち」の「しけ」は単独で名詞として用いた例がたとえば以下のとおりある。

しくしけかけてこかせ（『おもろさうし』巻十543）

『おもろさうし辞典』には「しけ 聖所。神の在所。『聖なる』の意の美称辞としてつかわれることもある。」と見え、『沖縄古語大辞典』には「しけ 団 聖所。神の在所。（中略）『しけ』は慣用化するうちに『しげ〜』で、『聖なる』の意の美称辞として使われるようになる。」とある。これらから「しけち」は「しけ」の独立性が強く、「しけ＋ち」の合成語の意識の強い言葉であったと考えることができる。

『おもろさうしの国語学的研究』が木の表記の「き」と「け」を「名前の一部のようになったもの」と「複合語の意識の強いもの」に分類したことの破綻は先述した。それならば、『おもろさうしの国語学的研究』が「き」（木）が「名前の一部のようになったもの」とした「あかき」と「ゆ（よ）すき」も「しけち」と同様の合成語の意識の強い言葉と考えることができるであろうか。私の答えは然りである。しかし、現代の首里方言と与那嶺方言でアカギと柞を表す語形には『おもろさうしの国語学的研究』が「あかき」と「ゆ（よ）すき」を「名前の一部のようになったもの」と判断したのももっともと考えるべき面がある。『沖縄語辞典』によれば現代首里方言では木と毛を表す形態素は、合成語の後部要素としての拘束形態（bound form）である時、以下のとおり母音に長短の音韻論上の対立が現れる。

siragi⑩（名）しらが。白髪。 ʔakagii ⑩（名）赤毛。赤ちゃけた髪をした者。

hanagi⑩（名）花を觀賞するために植える木。 hanagii ①（名）鼻毛。

maçigi⑩（名）まつ毛。 majugii ⑩（名）眉毛。

私が伊狩典子氏で確認したかぎりでは、この木と毛の場合の末尾母音の長短はアクセントの影響ではなく、合成度の意識の強弱の反映という感を受けた

ゆえに／ʔakagi／①（アカギ）は／ʔakagii／⑩（赤毛）とくらべて、赤とその後部の形態素（木）との合成度が強いと解釈し得る。これは／ʔakagi／が「赤い木」というただの修飾・被修飾語の関係ではなく、トウダイグサ科に属する特定の樹木を表すため、二つの形態

素を密着させたと解釈し得る。

また与那嶺方言でアカギを表す／haaκi／の／κi／の音は奈良朝中央語の非語頭のケ(jE31)に対応し、基本的には語頭に現れず非語頭に現れる音であるから、／haaκi／は「赤＋木」という二語の単純な接続ではなく、特定の樹木を表す単純語と解釈しうる。

しかしながらここで注目すべきは、与那嶺方言の／haaκi／の／κi／[k'i]の子音が無声音すなわち清音であり、有声音すなわち濁音／g／ではないことである。この／haaκi／の古形は音韻法則からは／*akagee／ではなく／*akakee／となる。このことはアカギという樹木をかつて「赤」と「木」の二語の単純な接続で言っていたことを示す。／*akakee／は、首里方言では連濁と、末尾音の短母音化により特定の樹木を表す単純語化し、与那嶺方言では／*kee／の部分を経験的には語頭に立たない／κi／で発音することにより、特定の樹木をさす単純語にしたと解釈すべきだと思う。与那嶺方言が／*akakee／の／*kee／の子音を濁音化しなかったのは、赤毛（／²akaaagii／または／haκaaagii／）との同音衝突をさけようとする意識の結果であろう。

一方、柞の場合、首里の久手堅憲夫氏によれば／'jusigi／であって／'jusi／だけでは言わないとのことである。そして与那嶺の山内昌敬氏によれば、／'jusiŋgi／とも／'jusiigi／（氏の発音は [juʃigi] と聞こえることもあった）とも言うけれど、／gi／を付けない言い方はしないとのことであった。しかし、前掲の琉球王府の森林法令には「よすの木」と助詞「の」を挟んだ言い方や、単に「よす」という語形が見えた。森林法令の樹木名には本土方言が入りこんでいる可能性を考慮すべき面もあるけれど、この場合重要なことは琉球の人々が「よす」の表記だけで柞と認識しえたということである。ちなみに喜界島上嘉鉄の住友常正氏は柞は単に [jusu] と言うと述べられた。そして何よりも『おもろさうし』の巻十三 837番オモロにおいて、

又 あかきとてゆすきとてとくか 又 あやきとてくせきとてほうはしりや
と「あやき」と「くせき」の対語として用いていることから、「あかき」と「ゆ（よ）すき」の「き」を木と意識していたことが確実に推定できる。

そして「するき」（棕櫚毛）にしても、本来、「かわ」ないし単に「する」で表現しているものを音数律の要請で「け＞き」を用いた語であるから、その「け＞き」を毛と意識していたと考え得る。

『おもろさうしの国語学的研究』は、「あえて述べるならば、現在のところア行、ハ行、ワ行を除く行の e → i の変化は口蓋音から変化し始めたと考えている。例えば、『いせゑけり』『おゑちへ』『いちへら』『いちへき』などの i の影響で口蓋化した『しゑ』『ちへ・ちゑ』『ちへ・ちゑ』がさらに『し』『ち』『ぢ』になったのが始まりである。おそらくは『しゑ』『ちへ・ちゑ』『ぢへ・ぢゑ』は不安定で、i の影響を受けつづけ、『し』『ち』『ぢ』に変化したのであろう。」(99頁) と述べる。口蓋化音や拗音という条件以外の自律的なケ>

キ・キ>チの変化は、一音節語がそれ自体としては十分な安定性を持たない語形であるために起こしやすかったと解しうるのではあるまいか。

『おもろさうし』の巻二では木を「け」（「こかねけ」）で表記していたけれども、巻二の初編の1613年と巻三以降の初編の1623年との間の十年間にケ>キおよびキ>チの変化が生じたと考えるのは余りに機械的思考であり、少なくとも17世紀初頭には、この変化が生じていたと考えるべきであろう。

V むすび

以上くだしく論じてきた本論のしめくりとして、冒頭に掲げた895 番オモロの大意の卑見をしめそうと思う。それに当り説明しておかなくてはならない問題がある。『おもろさうし』は同じ歌詞の記載を省略する傾向があり、オモロを正確に理解するためには、省略された歌詞を復元する必要がある。そしてその復元は、歌形論における対句部と、対句部と対句部との間で繰り返される反復句とを判別した上で、復元しなくてはならない。この問題については、波照間永吉『『おもろさうし』の記載法——記載の省略とオモロの本文復元をめぐる——』・「オモロ反復句一覧 巻別」が詳しい。895番オモロの反復句を「オモロ反復句一覧 巻別」は、「おゑたてて はりやせ ゑ やれ」とし、「備考」欄で「『ゑ やれ』のみカ」とするけれども、「とらちへ」と「おゑたてゝはりやせ」とが意味上自然につながるごとと、「ゑ やれ」は反復句の原初的形態といわれる囃子詞の典型であること、の二点を理由に、反復句は「ゑ やれ」のみという考えに私は傾く。故に895番オモロの復元オモロは以下のとおりとする（『『おもろさうし』の記載法」に従い、記載の復元部は破線で囲み、歌形論における反復句は実線で囲む）。

一 あやきうまに

あやきくらかけて

あやきふちとらちへ

おゑたてゝはりやせ

ゑ やれ

又 くせきうまに

くせきくらかけて

くせきふちとらちへ

おゑたてゝはりやせ

ゑ やれ

この後、この復元オモロの訳を示したいところであるけれど、詩の翻訳は可能かという一般論にはこだわらないとして、美称辞の「あや」と「くせ」の語源はともかくオモロ語にお

ける意味の相違が現在の研究水準では明確となっていないため、第一節と第二節の訳が同じとなるから、第一節と第二節の双方に当てはまる大意を以下に示すこととする。

美しい毛の馬に
美しい木の鞍を掛けて
美しい木の鞭を与えて
追い立てて走らせよ
あれ まあ

注

注1 毛は奈良朝中央語には音仮名の例はないけれども、「名毛伎^{なげき}せば」（『万葉集』1383）・「蚊間毛^{かまけ}ておらむ」（『万葉集』3794）等、乙類のケ・ゲの音を表す訓仮名として「毛」の字をもちいた例から、毛を乙類のケと推定するのが学界の共通見解である。

注2 「音韻法則の例外」は『音韻字海』の「跪 匹舍蛮資^{ひしばんし}之（本土方言の『ヒザマツキ^{ひさまつき}』に対応）」という例を取り上げて、「右の『之』が『己』の誤写である公算は非常に小さい。もし『之』が誤字でないならば、十六世紀末にすでに『C時代』が始まっていたということになるのである。」と述べる。

注3 『沖縄古語大辞典』の「凡例」は略号を以下のとおり説明している。

団『おもろさうし』所出のもの 団『南島歌謡大成 沖縄篇上』所収の古謡
團『南島歌謡大成 沖縄篇下』所収の琉歌など 團『琉球戯曲集』所収の組踊
團『混効験集』所収の語 團複合語中の重要な語素

また同辞典の「凡例」には「読みは、琉歌・組踊語のみに、その一般的な読み方を仮名で示した。読み方は『琉歌全集』『琉球戯曲集』の読みを参考にした。」とする。

注4 奈良朝中央語のオ列甲類を^o、オ列乙類を^øで表記する音韻表記の方式では、甲乙不明のオ列音を表記できない上に、^øという表記が音韻記号であっても音価として中舌母音を連想させるという難点がある（私は奈良朝中央語の音価については見解を持たない）。この弊を避けるためにオ列甲類を^{o₁}、オ列乙類を^{o₂}で表記する方式が広まっている。私もその方式を用いて論を発表したことがあるけれども、本論は「前稿」とのつながりを考えて、オ列甲類^o、オ列乙類^øの音韻表記の方式をもちいた。

注5 この辞典の「凡例」によれば團は動詞を表す略号。

注6 多良間島の方言を教えて下さったのは以下の各氏である。

奥浜真鶴氏（1903年生） 大山春翠氏（1917年生） 大山美江子氏（1917年生）以上の方は字仲筋。渡久山春好氏（1921年生、字塩川）

注7 末尾の「て」の仮名は「天」を字母とした字形であるけれど「てゝ」とも読み得る。尚家本の翻刻である比嘉実『沖縄研究資料14 尚家本『おもろさうし』』は末尾の踊り字を認めていないけれども、『沖縄研究資料14』がこのオモロで「こかねせひおしたてゝ」と読む「てゝ」と同じ字形である。仲吉本では「こかねせひおしたて」と「するきほうひきたて」の末尾の字は単に「て」と読むべきものであり踊り字は存在しない。池宮正治『おもろさうし諸本校異表』は校異を示していない、すなわち尚家本の「こかねせひおしたて」と「するきほうひきたて」の末尾に踊り字を認めていないわけである。後考を待つ。

注8 多和田真一郎「沖縄語史的研究序説——『語音翻訳』再論——」に依る。同論文は[U]の推定根拠として、「音価は、ハングルの「u」で表記されたものは、それと同じ[u]としてよいが、「o」で表記されたものについては一考の要があろう。／^o／から／u／へ移行してしまった、あるいは移行途中であるから、もとの[o]よりは[u]に近付いた音であると考えるべきであろう。[U]であろう。」と述べている。

注9 「うちちへ」の「よ」の字は、尚家本では判読困難。仲吉本に拠る。

注10 「あやなみやし」の「な」は「の」（格助詞）が前後の母音aに同化したものであろう。

注11 『図説琉球語辞典』の「蘭草」の項は、関連語として『奄美方言分類辞典』からの引用であろう「シェリコ feriko 蘭草の古名（奄）」を示しながらも、オモロ語の「せりこ」について、「この語は現在の『蘭草』を表す諸方言と繋がらない。何か特別の名称でもあったのだろうか。むしろ、『せりこ』は神女名『せりきよ』ではないか。」とする。私自身、奄美大島をはじめとする北琉球方言圏の各地の人々に、「蘭草の意味のセリコとかシェリコとかいう言葉を御存じありませんか。」とお尋ねしたけれども否定されるだけであった。篤学の氏の御教示を仰ぎたい。

注12 『沖縄語辞典』の「凡例」によれば、「自・不規則」は自動詞で不規則動詞のこと。

注13 『沖縄古語大辞典』の「みやし」の項の語形欄がしめす「まーし」という言葉は、外間守善・玉城政美『南島歌謡大成Ⅰ 沖縄篇上』461頁収録の「粟国島のろのおもり」（山内盛彬『琉球王朝古謡秘曲の研究』）に「あやぬまーしうちしち」と見える言葉であり、『南島歌謡大成』は「綾の筵を打ち敷いて」と訳している。この「まーしうち」という表現も『おもしろさうし』の「あやのみやしうちよわちへ」の「みやし」を筵と考える証左となろう。

注14 琉球の船の構造の歴史については、池野茂『琉球山原船水運の展開』の「二 山原船水運を担った船」がわかりやすい。

注15 久米島仲里村比嘉の方言を教えて下さったのは以下の各氏である。

神谷嘉衍氏（1915年生） 島袋次郎氏（1914年生） 儀間光輝氏（1912年生） 儀間昌貞氏（1923年生）

なお、天野鉄夫『琉球列島植物方言集』の「ヒメガマ」の項には久米島方言として「ガマヌフー」とある。これは「蒲の穂」の意味。なお久米島方言で蒲の語頭音を有声音（濁音）で言うのは、学校教育による新しい言い方らしい。1935年生の上江州清玄氏（仲里村字謝名堂）は[gama]・[gama nu Φu:]と発音なさった。

注16 『今帰仁方言辞典』で蒲という言葉は見つからない。山内昌敬氏にお尋ねしたところ、戦前の与那嶺に蒲が生えていたかどうかはわからず、氏が通学した与那嶺から約1500メートル離れた兼次小学校（現在は字今泊に属する地にあった）の側には生えていたという。蒲は氏の発音では／gama／であったけれど、氏は上述の理由でこの／gama／が与那嶺方言であるかどうか疑っておられた。

なお仲宗根政善「今帰仁方言概説」には、与那嶺方言では「二音節目は上の表によってわかるようにすべて長音化する。ただし母音a,u,iによってちがいがあり、aの場合は規則的に長音化する」とある。ここからすれば蒲は／^ogamaa／であるべきなので、この点からも／gama／が与那嶺方言であることは疑わしくなる。

ただし、私の観察ミスの可能性もあるのだけれど、山内氏の発音からは総じて長音化を感じず、『今帰仁方言辞典』に長音で現れる言葉も、氏の発音では長音化しないものにしばしばぶつかった。

注17 1994年夏の久米島での調査の際には、スルギ原は土地改良によりサトウキビ畑となっていたため、蒲は生えていたけれどもスルギの正体は確認できなかった。平良朝春氏をはじめとする仲里村教育委員会の方々と仲村昌尚氏の御協力により、仲里村字比屋定ハンタ原でスルギを確認できた。

なお、『琉球列島植物方言集』のカヤツリグサ科の「ヒトモトススキ」の項に、久米島方言として「シギ」とあり、〔備考〕に「シギは、スゲの意。」とあるのは誤りである。久米島方言の〔ʃigi〕（菅）は、久米島における蓑の最も代表的な材料であり、まったくの雑草である〔surugi〕（ヒトモトススキ）とは別の植物である。

注18 油井方言において毛を表す〔kʲiː〕と〔higi〕の単純語としての用法の相違は明瞭ではなく等価として用いることが多いようである。ただし、複合語では例えば、白髪は〔ʃirjaɕi〕で、脇毛は〔wakʲihigi〕であるというふうに固定した用法となっている面があるようである。

注19 従来の宮古方言の研究で、中舌母音〔i〕又は〔ɪ〕とされてきた音は、舌尖母音〔ɿ〕であるとする上村幸雄「琉球列島の言語（総説）」にしたがった。

注20 『図説琉球語辞典』の「髪」の項は、「アカは、ア（吾）とカマチ（髪）の結合した形が変化したものと考えられる」とする。

注21 『沖縄語辞典』の／çi／という音韻記号の音価は、同辞典の「凡例」によれば〔tʃi〕～〔tʃi〕であり土族男子特有の発音。

注22 「今帰仁方言概説」は、与那嶺方言では「u,iの場合は第二音節目が高くなるか、あるいは高くはじまる場合には必ず、長音化し、その他の場合は、長くも、短くも発音される。半長音になる場合が多い。iよりもuの方が比較的長音化の傾向がある。」とする。この語のアクセントは『今帰仁方言辞典』によれば、／ciguʳu／である。

注23 この「つぐ」という言葉は中国語に由来しよう。藤堂明保『学研漢和大辞典』の「棕」の項を引くと、以下の音の変遷を示している。

上古 中古 中世 現代
tsuŋ — tsuŋ — tsog — tsuəŋ

勿論「する」（棕櫚）もそもそもは中国語に違いないけれど、こちらは九州方言を経由して琉球方言に入ったものであろう。

注24 上代語では水のミは甲類であり、琉球方言の祖形が／*medu／に遡るのは音韻対応法則の例外となり、このこと自体が琉球方言研究の難問の一つとなっている。服部四郎「日本祖語について・19」は水の琉球方言の祖形をもとに、水の日本祖語形として／*medu／を推定するけれども、服部氏が説くように、奈良朝中央語のエ列甲類音の母音は日本祖語／*ia／に遡り、エ列乙類音の母音は日本祖語／*ai／に遡るものであろうから、日本祖語に母音素／e／が存在したかどうかは今後の徹底的な検討を待つ問題である。

注25 もっとも「めすかわ」（巻七391・巻廿二1546）という語があり、『おもろさうし辞典』は「めすーかわ（めす川）『めすかわ』は水井戸の意か。雨乞いのため、天上にある『めすかわ』の水を乞いに昇ったとオモロに謡っている。」とし、『図説琉球語辞典』の「水」の項は「水を表す琉球語は、単一語形の*meduにさかのぼる。miduでないところが注目される。（中略）【『おもろさうし』では一引用者】このように多くは「みつ」または「みづ」が用いられるけれども、別表現の『めすかわ』<391>は『水川』『水井戸』と思われ、水に『めす』とある。」とする。しかし「水井戸」という表現は疑問であり、『沖縄古語大辞典』が「めすーかは【めす川】団 井泉の名。比定

地未詳。」とするのは穏当である。

注26 嘉靖三十二年とは西暦1553年。

注27 同辞典の「凡例」によれば、「㊦薩（里）」は薩摩郡里村。

注28 『おもろさうし辞典』の「凡例」によれば、この場合の「おもろ表記」とは、「国語的仮名遣い」と表音的仮名遣いの摩擦の中で、国語的仮名遣いを表記法の規範にしようとする規範意識が強く働いて、婿を『もこ』、国を『こに』と書くようないき過ぎた類推表記で、『規範意識による類推仮名遣い』ともいうべきもののこと。

注29 評定所本の末尾は「よ」を朱書で「えたり」に改めている（参照、沖縄県教育委員会『混効験集』）

注30 奈良朝中央語のキ（酒）には甲類と乙類の両表記が以下のとおり存在する。

すすこりが 醸みし美岐に 我酔ひにけり（『古事記』歌謡49） 「岐」は甲類のキの仮名。

黒紀白紀乃御酒（『続日本紀』宣命三八勅） 「紀」は乙類のキの仮名。

キ（酒）に甲類と乙類の両表記が存在する理由には次の三説がある。

- ① クシ（酒）のクを語基として、母音交替によりキ_甲が成立し、クに接尾辞 i が融合してキ_乙が成立した。（山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』318頁）
- ② 『続日本紀』のキ_乙の表記は、時期的に甲乙の混乱の兆しとも考えることができる。（白藤禮幸『奈良時代の国語』111頁）
- ③ 「黒紀白紀」のキ_乙は、酒ではなく、「木を焼いて作る薬灰」の意。（西宮一民『上代祭祀と言語』199頁）

①について述べておくと、キ_乙（酒）の日本祖語形は／*kōi／ではなく／*kui／となるはずであるから、『おもろさうし』では少なくとも「け」ではなく「き」で表記してある音になる。故に、①②③のどの説に従っても「みき」と「しけち」の違いを奈良朝中央語のキ（酒）に甲類と乙類の両表記が存在することと結び付ける必要はない。

注31 与那嶺方言の木は単純語としては毛と同音で／kii／[k'i:]である。『今帰仁方言辞典』で／ki／が語頭に立っているのは以下の四語のみである

κii（擬音）陶器や金属性のもののきしる音。

κiiκii（擬音）きいきい。きしる音。 κiina'i（副）きいきい音をたてて。

κiiruN〔動・規1ラa〕くれる。与える。あげる。やる。

参 考 文 献

天野鉄夫 『琉球列島植物方言集』新星堂図書出版1979

天野鉄夫 『図鑑琉球列島有用樹木誌』沖縄出版1989

有坂秀世 「古事記に於けるモの仮名の用法について」（『国語と国文学』9巻11号1932）

有坂秀世 「母音交替の法則について」（『音声学協会会報34』1934）

以上、有坂秀世『国語音韻史の研究』明世堂1944に収録。

池野茂 『琉球山原船水運の展開』ロマン書房本店1994

池宮正治 『おもろさうし諸本校異表』（『尚家本おもろさうし複製版別冊付録』ひるぎ社1980）

池宮正治 「浦添関係おもろ」（浦添市史編集委員会『浦添市史 第二巻資料編1』1981）

池宮正治 「『おもろさうし』の成立」（『琉球文学論の方法』三一書房1982収録）

池宮正治 「酒と土地と太陽の人物」（おもろ研究会『おもろさうし精華抄』収録）

- 池宮正治 「^{こがねげ}黄金木の下で」(おもろ研究会『おもろさうし精華抄』収録)
- 池宮正治 「祭儀の時間」(おもろ研究会『おもろさうし精華抄』収録)
- 池宮正治 「王と王権の周辺ー『おもろさうし』にみるー」(琉球新報社『新琉球史ー古琉球編ー』1991)
- 池宮正治 『沖縄ことばの散歩道』ひるぎ社1993
- 伊波普猷 『伊波普猷全集』平凡社1974
- 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重 『琉球国由来記』風土記社1988
- 上村幸雄 「琉球列島の言語(総説)」(『言語学大事典第4巻 世界言語編(下ー2)』三省堂1992)
- 沖縄県教育委員会 『混効験集』1978
- 沖縄県教育委員会 『金石文 ―歴史資料調査報告書V―』1985
- 沖縄古語大辞典編集委員会 『沖縄古語大辞典』角川書店1995
- 沖縄大百科事典刊行会 『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社1983
- 長田須磨・須山名保子 『奄美方言分類辞典 上巻』笠間書院1977
- おもろ研究会 『おもろさうし精華抄』ひるぎ社1987
- 嘉手刈千鶴子 「『おもろさうし』書き改めと『混効験集』編纂について」(『南島史学』11号1978)
- 嘉手刈千鶴子 「桑木の鼓」(おもろ研究会『おもろさうし精華抄』収録)
- 角川日本地名大辞典編纂委員会 『角川日本地名大辞典47 沖縄県』角川書店1986
- 国立国語研究所 『沖縄語辞典』大蔵省印刷局1963(1983年七刷をもちいた)
- 崎濱秀明 『統沖縄旧法制史料集成 第二巻 女官御双紙・服制』私家版1978
- 崎濱秀明 『蔡温全集』本邦書籍1984
- 佐藤清 「琉球古文獻におけるイ列乙類音対応音の表記について」(『沖縄文化研究13』1987)
- 島袋盛敏・翁長俊郎 『標音評釈 琉歌全集』武蔵野書院1968
- 島村幸一 「『混効験集』オモロ語注と『おもろさうし』「原注」についての考察」(琉球方言論叢刊行委員会『琉球方言論叢』1987)
- 白藤禮幸 『奈良時代の国語』東京堂出版1987
- 菅野裕臣 「言語資料としての『海東諸国紀』」(田中健夫『海東諸国紀』岩波書店1991)
- 高橋俊三 『おもろさうしの動詞の研究』武蔵野書院1991
- 高橋俊三 『おもろさうしの国語学的研究』武蔵野書院1991
- 田畑英勝・亀井勝信・外間守善 『南島歌謡大成V 奄美篇』角川書店1979
- 玉城政美・新里幸昭・高橋俊三 「久米島古文書(一)」(沖縄久米島調査委員会『沖縄久米島資料編』弘文堂1983)
- 玉栄清良 『平敷屋朝敏の文学』(再版)東海出版1978
- 多和田真一郎 「沖縄語史的研究序説――『語音翻訳』再論――」(平山輝男博士古稀記念会『現代方言学の課題 第3巻史的研究篇』明治書院1984)
- 多和田真一郎 「碑文にみる沖縄語」(『琉球の方言8』1983)
- 塚田清策 『琉球国碑文記の定本作成の研究 別巻第三巻 伊波本』学術書出版会1970
- 藤堂明保 『学研漢和大辞典』学習研究社1978
- 鳥越憲三郎 『おもろさうし全釈』清文堂1968
- 仲宗根政善 「今帰仁方言概説」
- 仲宗根政善 「宮古および沖縄本島方言の敬語法ー『いらっしゃる』を中心としてー」

- 仲宗根政善 「おもろの尊敬動詞「おわる」について」
- 仲宗根政善 「与那嶺方言の撥音「ン」と促音「ツ」」
- 以上、仲宗根政善『琉球方言の研究』新泉社1987に収録。
- 仲宗根政善 『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店1983（1986年再版をもちいた）
- 仲原善秀 『久米島の歴史と民俗』第一書房1990
- 仲原善忠 『仲原善忠全集』沖縄タイムス社1977
- 仲原善忠・外間守善 『校本おもろさうし』角川書店1965
- 仲原善忠・外間守善 『おもろさうし辞典・総索引』角川書店1967
- 仲原善忠・外間守善 『おもろさうし辞典・総索引第二版』角川書店1978
- 名嘉真三成 『琉球方言の古層』第一書房1992
- 中本正智 『図説琉球語辞典』力富書房金鶏社1981
- 中本正智・比嘉実・クリストレイク 「おもろ鑑賞—琉球古謡の世界・65」（『言語』19巻2号1990）
- 中本正智 『日本列島言語史の研究』大修館書店1990
- 西宮一民 『上代祭祀と言語』桜楓社1990
- 橋口 満 『鹿児島県方言辞典』桜楓社1987
- 服部四郎 「琉球方言と本土方言」（伊波普猷生誕百年記念会『沖縄学の黎明——伊波普猷生誕百年記念誌——』沖縄文化協会1976）
- 服部四郎 「琉球語源辞典の構想」（『沖縄文化研究 6』1979）
- 服部四郎 「音韻法則の例外——琉球文化史への一寄与——」（『日本学士院紀要』36巻 2 号1979）
- 服部四郎 「日本祖語について・1～22」（『言語』第7巻1号～第8巻12号 1978～1979）
- 服部四郎 「本誌前号所載の拙論への補説」（『言語』10巻3号1981）
- 波照間永吉 「『おもろさうし』の記載法——記載の省略とオモロの本文復元をめぐる——」（『文学』1989年11月号）
- 波照間永吉 「オモロ反復句一覧 巻別」（『沖縄芸術の科学 第4号』沖縄県立芸術大学付属研究所1991）
- 比嘉実 『沖縄研究資料14 尚家本『おもろさうし』』法政大学沖縄文化研究所1993
- 東恩納寛惇 「くるまがさ」（『東恩納寛惇全集8』第一書房 初出は『文化沖縄』第三巻第四号1951）
- 平山輝男 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の研究』桜楓社1983
- 平山輝男 『南琉球の方言基礎語彙』桜楓社1988
- 平山良明 「^{てだがあな}太陽穴について」（おもろ研究会『おもろさうし精華抄』収録）
- 外間守善 『混効験集 校本と研究』角川書店1970
- 外間守善 『沖縄の言語史』法政大学出版局1971
- 外間守善 『おもろ語辞書——沖縄の古辞書混効験集——』角川書店1972
- 外間守善・西郷信綱 『日本思想大系18 おもろさうし』岩波書店1972（1982年8刷をもちいた）
- 外間守善 『おもろさうし』角川書店1993
- 外間守善・玉城政美 『南島歌謡大成Ⅰ 沖縄篇上』角川書店1980
- 外間美奈子・平良佳子 「『沖縄語辞典』の改訂作業」（沖縄言語研究センター『沖縄言語研究センター研究報告4 那覇の方言 那覇市方言記録調査報告書Ⅱ』1994）
- 宮良當壯 『日本方言彙編(1)』（『宮良當壯全集1』第一書房1982）
- 武藤美也子 「『おもろさうし』における植物考」（『地域文化研究第2・3号』1978）

山口佳紀 『古代日本語文法の成立の研究』有精堂1985

本土方言資料のうち、『古事記』は日本思想大系（岩波書店）、『日本書紀』は井上光貞『日本書紀』（中央公論社）、『万葉集』は塙書房本をもちい、他の作品は新日本古典文学大系（岩波書店）をもちいた。

謝 辞

本論が成立したのは、何よりもまず琉球方言を教えて下さった各地の方々の御厚意があつてのことであり、その方々にここで改めてお礼を申し上げる。

そのほかに御協力いただいた方々にたとえば以下の各氏がいる。

喜界島町中央公民館の福岡功彦氏には、多くの喜界島方言の話し手を御紹介していただいた他、多大の御援助をいただいた。

山下文武氏からは奄美の島々での調査にあたり種々の御援助をいただいた。

松山光秀氏と町田進・加代子御夫妻には徳之島での調査にあたり多大の御援助をいただいた。

甲澄枝氏には沖永良部島での調査にあたり多大の御援助をいただいた。

豊平朝美氏をはじめとする琉球大学付属図書館情報サービス課の方々からは、仲原文庫蔵の『久米具志川間切旧記』の閲覧にあたり格別の御配慮をはかっていただいた。

平良朝春氏をはじめとする仲里村教育委員会の方々には久米島での調査にあたり多大の御援助をいただいた。

上江州清玄氏には、久米島での調査に際して、植物学上の種々の御教示をいただいた。

多良間島での調査に際し、天久春則氏および鈴木稔・澄子御夫妻の御援助をいただいた。

上村幸雄氏と外間美奈子氏をはじめとする沖縄言語研究センターの諸氏からは、現在編集中の『新沖縄語辞典』の informants である久手堅憲夫氏・伊狩典子氏を御紹介いただいたほか、多大の御援助と御教示をいただいた。

かりまたしげひさ氏からは、現代琉球諸方言からオモロ語にいたるまで、多岐にわたり多大の御教示をいただいた。

故中本正智氏は健在の折、本誌への寄稿を勧めて下さり、同時に現地調査に消極的な私に対し現地調査の必要性を説いて下さった。氏の言葉を曲りなりにも果したのが本論である上に、氏の説を否定、批判した面が多々あるため、氏に読んでいただくことを楽しみにして調査執筆していたのであるけれども、延々もたつき叶わぬこととなってしまった。慎んで冥福を祈りたい。

比嘉実氏は終始あたたかく見守ってくださった。

以上名前をお挙げした方々は本論に御協力いただいた方々の中のごく一部にすぎない。本論を成すまでには、とてもここで名前を挙げ切れないほどの多くの方々の御援助をたまわった。

私は以前から琉球方言に関心を抱き、論じてきたけれども、現地調査は気が進まなかった。本論のため多分に仕方なく現地調査に乗り出したのであるけれども、訪れた各地で多くの方々の望外の御厚意に接し、いつのまにか現地調査に赴くのが楽しみになっていた。このことを記して、御援助いただきながらお名前を挙げなかった方々への感謝の言葉としたい。

本論は文部省の平成7年度科学研究費補助金（奨励研究（B））の交付を受けたものである。